

# ルワンダ王国の初穂儀礼

宇野 公一郎

## 目次

1. はじめに
2. ベルギーによる王権祭祀の禁止
3. 「四つの最古の食用作物」と Bumbogo 地方
4. Tsoobe の儀礼王と Bumbogo の農業儀礼家集団
5. 「初穂の道 (*Inzira y'umuganura*)」の訳と解説
  - a. 畑の準備
  - b. 鋤の支給
  - c. 播種
  - d. *Umurorano* (作柄標本) 収穫と儀礼
  - e. *Igitenga* 籠の往来と初穂の搬送
  - f. *Umuganura* (初穂祭)
6. 初穂祭の日程のずれの背景
7. *Umurorano* 儀礼と閏月
8. おわりに

## 1. はじめに

かつてルワンダでは、宮廷でも一般農家でも、雑穀の最初の収穫で作ったポレンタ (*umutsima*)<sup>1</sup> を食べて収穫を祝う初穂祭 (*umugaruna*)<sup>2</sup> が毎年行

<sup>1</sup> *Umutsima* (-*tsima* 3, 4) は、雑穀やマニオクを粉にして煮て水分を蒸発させたペースト状の食物、あるいはそれが乾燥してパン状になったもの (Coupez *et al.* 2005: 2597)。フランス語で *pâte*、*pain*、*polenta*、英語で *gruel* 等と訳されている。本稿ではポレンタを使うが、引用では原著者の訳語を適宜尊重する。

<sup>2</sup> 名詞 *umugaruna* (-*ganura* 3, 4) は、「最初の収穫」と「ソルガムとシコクビエの初穂を食べる儀礼」を指し、動詞の -*ganur*- は「収穫を初めて食べる」と「ソルガムとシコクビエの初穂を儀礼的に食べる」を意味する (Coupez *et al.* 2005: 533)。

われた。本稿で取り上げる王朝秘典の「初穂の道 (*Inzira y'umuganura*)」<sup>3</sup>は宮廷の初穂祭の手順を伝えている。

初穂祭はルワンダの内外で広く見られた農耕儀礼である。今のルワンダの領内でも、植民地時代初期までルワンダ王朝の支配下に入っていなかった僻地のフツの小王（ヒンザ）たちは、独自に初穂祭を行っていた（Pauwels 1969: 80; 宇野 2011: 128–129）。ルワンダの南のブルンジでは、ルワンダ語で初穂ないし初穂祭を指す *umugaruna* という単語が播種祭を意味し、ブルンジ王は陰暦の *kigarama* 月（西暦 12 月）<sup>4</sup>に聖なるソルガムのポレンタ（7月に特別の畑で収穫して保存していた穀粒で作った）を食べたのち、新しい種を植えることを全国に命じた。ルワンダ・ブルンジの西、Kivu 湖の西南にあった Bushi の王国でも、「喜びの声を上げる祭」(*mubandampundu*) があって、王がソルガムのポレンタを食べてから農民に播種を命じた。ブルンジの東南、今のタンザニア西部の Buha は、そこからルワンダにソルガムが伝わったという伝承がある所だが、いくつもの小王国に別れていた。そのひとつ Heru 王国では、ソルガムとインゲンマメを収穫する 7月に、*Ndolegwa ya Mpeshi* という初穂祭を十日前後にわたって行った（Mworoha 1977: 254–260）。

これらの農業祭は年中行事の中でも最も規模が大きく賑やかなものであるだけに、植民地当局とキリスト教会の注意を惹かずにはおかなかった。国際連盟の委任統治が始まって間もなく、ルワンダでもブルンジでも *umuganura* 祭は禁止された。この事態は「初穂の道」の伝承にも影響したと思われるので、まずその顛末を簡単に見ておく。

## 2. ベルギーによる王権祭祀の禁止

ルワンダがドイツの植民地にされる直前、1896年に母方オジの Kabare た

---

<sup>3</sup> 「初穂の道」のルワンダ語原文とフランス語訳は d'Hertefelt & Coupez 1964: 76–93 にある。

<sup>4</sup> 以下、陰暦の月は漢数字、西暦の月はアラビア数字で書く。

ちが起こした Rucunshu のクーデタ（宇野 2007: 137）によって 15 歳で即位させられた Yuhi V Musinga 王は、母とオジたちの傀儡だった。しかし Kabare が死に（1911）、母方 Ega クランの圧力が弱まってくると、Musinga はドイツ人の後援を得て母方イトコの Rwidegembya や Kayondo と公然と対立し始めた。これに対しイトコたちは、1916 年、ルワンダに進駐してきたベルギー軍に接近し、Musinga を誣告した。ベルギー軍は王を投獄し、王制を廃止しかかった。

しかしベルギーは、ベルギー領コンゴでの直接統治がうまくいっていないのに比べ、イギリスがウガンダで間接統治を成功させているのを見て、ルワンダでは間接統治を採用することにし、1917 年 4 月、Musinga を復権させると同時に、王の力を弱めるため、色々と手を打った。その主なものとして、ベルギーの了解のない死刑の禁止（1917）、信教の自由の承認（同）、ベルギーの了解のない司法権行使の禁止（1922）、王の首長任免権の剥奪（1923）、首長の種類と人数の大規模な縮小（1926）、首長の任地居住の義務化（王の近くに長居させない）などがあった。

初穂祭禁止の直接の引き金となったのは、王の側近と Ega クランとの対立の激化である。Musinga には常時 7-8 人の妻と数人の妾がいたが、最も寵愛された Nyirakabuga と Kanyange を含め、ほとんどは王母と同じ Ega クランだった。王位継承の本命は Kanyange の生んだ王子といわれた。Nyirakabuga はヨーロッパ人を味方にして自分の息子の後ろ楯にしようとし、行政官や神父は Nyirakabuga との交際を楽しんだが、子供にキリスト教の本を与えるなど、行き過ぎがあった。王の側近たちは、Nyirakabuga をはじめ、Ega クラン出身の妻たちを宮廷から追放するよう王を説得し、1923 年 2 月に実行した。

これに対し、1924 年、Kayondo は Tsoobe の儀礼王 Gashamura をベルギーに告発した。Kayondo は Gashamura のような「妖術師」と *unugamura*（初穂儀礼）のような「呪術」が Musinga の反ヨーロッパ意識を強化していると指摘した。ベルギーはこれを信じ、1925 年 1 月、Gashamura を投獄し、3 月に

は密かにブルンジに護送し、二度とルワンダには戻さなかった。さらにベルギーは Musinga に対し、初穂儀礼を含め、王朝秘典に含まれるすべての祭祀を禁止すると通告した。Musinga は白衣の神父に何度も助けを求めたが、「迷信」のために介入してくれる宣教師はいなかった。1925 年 6 月、初穂儀礼が行われなかったことから、王権祭祀の廃止が国中に知れ渡った (Kimonyo 2008: 29; Kagame 1975: 179–180; Des Forges 1972: 249–253, 277–279, 310)<sup>5</sup>。

宮廷儀礼家の序列第一位の Tsoobe クランの儀礼王は王朝秘典に含まれる宮廷儀礼のほとんどに登場するが、特に初穂祭はその準備段階から一貫して Tsoobe 儀礼王が取り仕切り、他クランの儀礼王や宮廷儀礼家が出る幕は殆どないので、Gashamura の逮捕は初穂祭の実施だけでなく宮廷儀礼家集団内の儀礼情報の共有や伝承にも多かれ少なかれ支障を来したのではないと思われる。

### 3. 「四つの最古の食用作物」と Bumbogo 地方

ルワンダでは、シコクビエ<sup>6</sup>、ソルガム (モロコシ)<sup>7</sup>、isogi<sup>8</sup>、食用ヒョウタン<sup>9</sup> という四種の植物が imbuto nkuru 「四つの最も古い食料作物」<sup>10</sup> と呼ばれ

<sup>5</sup> なお、ブルンジでは王のキリスト教化によって 1927 年から播種儀礼の脱呪術化が始まり 1930 年から行われなくなった (Gahama 2001: 359–360)。

<sup>6</sup> 「シコクビエ (uburo)」: -ro 11, 14。フランス語は éleusine。イネ科オヒシバ属の *Eleusine corocana* (L.) Gaertner. (Troupin 1987: 244, 245)。

<sup>7</sup> 「ソルガム (amasaka)」: -saka は -shaka の複数形。イネ科モロコシ属の *Sorghum bicolor* (L.) Moench, syn. *S. caudatum* Auct. non Staff. 総称的な名称で、数十の「品種」を含む。ルワンダのほとんどどこでも生え、穀粒を粉にして煮て食べたり、ビールを醸造する (Troupin 1987: 375–376; Coupez et al. 2005: 2057, 2155)。

<sup>8</sup> isogi: -sogi 9i, 10i。フランス語で épinard 「ほうれん草」と訳される (Pagès 1933: 199–200)。フウチョウソウ科 (Capparaceae) の *Gynandropsis gynandra* (L.) Briq. (Troupin 1978: 313)。茎と葉をインゲンマメなどと一緒に煮て食べる。苦味がある (Coupez et al. 2005: 2322)。

<sup>9</sup> 「食用ヒョウタン (inzuzi z imyuungu)」: inzuzi (-yuzi 11, 10) はヒョウタン (*Lagenaria siceraria*) の類を指し、実の形は非常に多様で、食用と容器用がある (Coupez et al. 2005: 2820; Troupin 1983: 458)。imyuungu (-uungu 3, 4) は、inzungwane (-ungwane 11, 10) というヒョウタンの若い毛深い実で、甘い (Coupez et al. 2005: 2706, 2705)。

<sup>10</sup> 「四つの最も古い作物」(imbuto nkuru): -buto 9, 10 は「種子、苗、挿し木など、蒔いたり植えたりするものすべて」を指し、-kuru 「古い」という形容詞がつくと、伝統的に最も古いと見なされている四種の食用作物の総称となる (Coupez et al. 2005: 250, 1431)。

た。ルワンダ王の王子たちの臍の緒はこれら四種の植物の種と共に木箱に収められたという (Pagès 1933: 375)。

このうち、ヒョウタンは家の周りなどに植えるのが普通で、広い面積で栽培されることはなかった。また、*isogi* は作物というより野草で、苦みのある風味が非常に好まれた。ソルガムやシコクビエのポレンタ (*umutsima*) は乾くと食べにくいので、*isogi* や *isogi* とインゲンマメを煮たものと一緒に口に入れた (Coupez *et al.* 2005: 250; Pagès 1933: 32, 318; Pauwels 1969: 75–76, 109, 112)。

四つの最古の作物のルワンダへの導入は Kigwa (天から降りてきたツチの祖先) や Gihanga (Kigwa の子孫で Nyiginya 王朝の神話的創始者) に帰されることもあるが、Nyiginya 王朝の中興の祖 (Vansina によれば創始者) とされる Ruganzu II Ndori 王が Bumbogo から導入し、初穂儀礼を始めたという伝承もある (Pagès 1933: 499; Bourgeois 1957: 418; Pauwels 1969: 76)。Bumbogo は、Nyabarongo 川の北側の諸支流の流域で、ルワンダで最も農業に適した自然条件に恵まれているといわれる。

よく知られているのは次のような説話である：

Bumbogo 国の首長が Ruganzu 王の姉妹を誘拐して妻にした。Ruganzu は復讐を誓った。略奪者は義兄である王をなだめようと贈り物をした。その中に、当時ルワンダにはなかったソルガムとシコクビエがあった。王は略奪者を許すかわりに、毎年ソルガムとシコクビエを一籠ずつ都に持ってくる義務を課した。王はそれを首長たちに分け与えて栽培を勧めた (Pagès 1933: 499)。

あるいは：

Ruganzu は Bumbogo の国を旅していて、一軒の家からおいしそうな食べ物匂いが漂ってくるので、中に入って尋ねたところ、インゲンマメと一緒に *issogi* (「ホウレンソウ」) を煮ていた。彼はその種を女主人から貰ってルワンダに持ち帰った。この時、彼はそれまで食べたことがなかったソルガムのパンを同じ女性から贈られ、ル

ワンダにソルガムを持ち帰ることにした (Pagès 1933: 500)<sup>11</sup>。

こうしてソルガム、シコクビエ、および *isogi* がルワンダに導入され、それを記念して、毎年、ルワンダの都で「最初の収穫」の祭 (*umuganura, kuganuz' umwami*) が祝われようになったという (Pagès 1933: 500)。

これらは作物の起源説話としてはあまり古いものとも思えないが、Bumbogo 産の四種の作物はルワンダ王権の再活性化と強く結びついていた。それは、初穂祭だけでなく、ルワンダ王の即位式で起臥太鼓を新調する時や、水飼儀礼で王権太鼓の「心臓」を採取する際に Bumbogo から運んだ四種の種を播く儀礼を行ったことから明らかなである (宇野 2013: 108; 宇野 2014: 156)。

次に、初穂祭と Bumbogo との関係を見ておこう。

#### 4. Tsoobe の儀礼王と Bumbogo の農業儀礼家集団

ルワンダ宮廷の初穂儀礼には、Tsoobe の儀礼王の領地<sup>12</sup>の一つである Bumbogo 地方で特別に栽培された作物が使われた。この領地は、上記の作物起源説話にも登場した Ruganzu II Ndori 王がフツの首長 (ヒンザ) たちから Bumbogo を奪った時、その一部を Tsoobe に与えたといわれる (*Histoire et chronologie du Ruanda* 1956: 59; Vansina 2001: 64, 76, 87; Vansina 2004: 46, 55, 65)<sup>13</sup>。Tsoobe クランの本貫は Bumbogo ではなく、Nyabarongo

<sup>11</sup> このほかにも、「Ruganzu が Bumbogo を巡歴していたとき、蟻 (*imonyo*) が穀粒を運んでいるのを見た。ルワンダにはないものだったので、大事に持ち帰って植えた。六ヶ月後、立派な穂が実り、その穀粒をまた播いた。こうしてルワンダにソルガムが広まった」という伝承もある (Pagès 1933: 499–500)。これによく似た説話がブルンジにあり、蟻から穀物を取りあげたのはブルンジ王国の始祖 Ntare とされる (Mworoha 1977: 255)。

<sup>12</sup> Tsoobe に限らず、各儀礼王の領地はルワンダ王の地方行政官の管轄外だった (Kagame 1952: 121; Maquet 1954: 125; Maquet 1961: 103)。

<sup>13</sup> しかし、Nyagahene が 1980 年代に調査した Bumbogo 地方のインフォーマントは、Tsoobe の首長たちが Bumbogo に来たのは 19 世紀末の Kigeri IV Rwabugiri 王の時代に過ぎないと言ったという。Bumbogo のヒンザ (Swere リニジ) は Tsoobe に抵抗したが、段々抑えられ、Musinga 王の時代、つまり Tsoobe で言えば Rukangirashyamba とその息子 Gashamura の時代に、植民地政府の干渉により Tsoobe の支配が確立したという (Nyagahene 1997: 532, 533, 549–550)。

川の南側の Rukoma (Gitarama 省) であり、儀礼王の都 Kinyambi (「王国」の意) もそこにあった。

ベルギーに妖術師として逮捕された上記 Gashamura やその父 Rukangirashyamba は、Musinga 王の側近中の側近の大儀礼家というだけでなく、大富豪としても全国的に知られ、「Gashamura のように金持ち」という表現があったほどだという。Tsoobe クランは彼らの宮廷における役割からして豊かであったろうが、Musinga 王の父 Kigeri IV Rwabugiri (在位 1867–1895) が Gashamura の祖父 Kanyamuhungu を重用して領地を増したことから勢力をさらに拡大したといわれる。また Rucunshu のクーデタが起きた際、Tsoobe は勝ち組の Musinga 王について、さらに領地を増やした。他方、負け組の Rutarindwa 王についた Kono の儀礼王は Kigali (Bumbogo) の所領を Tsoobe に蚕食されたという (Nyagahene 1997: 549–550; *Histoire et chronologie du Ruanda*: 58–59, 64–65)。

宮廷儀礼用の作物の栽培区域はかなり広く、Bumbogo の Nyabarongo 川、Base 川、Conyonyo 川、Cacika 川に囲まれ、Muhondo 丘、Huro 丘、Munanira 丘、Mbirima 丘 (Kigeri IV Rwabugiri 王の母 Nyirakigeri の墓がある)、Gasiho 丘、Congori 丘、Cyombgwe 丘、Kiruka 丘、Rushashi 丘、Rukura 丘、Joma 丘、Minazi 丘、Burimba、Kigali 丘、Va 丘を含み、この区域に外国人が入ることは禁じられた (Bourgeois 1957: 419–420)。1908 年に Loupias 神父がその一角 (Base 川と Nyabarongo 川の間) を横切って Musinga 王の怒りを買ったという (Delmas 1950: 107)。後述するように、地域内の住民に対しても制限が課された。

宮廷儀礼に使う作物の栽培には Ega クランの Swere リニジに属するフツの農業儀礼家集団があたった<sup>14</sup>。具体的には「Myaka (別名 Musana) の子孫

---

<sup>14</sup> Nyagahene の 1980 年代の全国調査によると、Swere リニジは Ega クランの大リニジで、Bumbogo 地方だけでなく、ルワンダの西部全体に広がっていて、内部構成は 99.70% がフツ、0.27% がツチ (Tutsi)、0.03% がトゥワ (Twa) であった (Nyagahene 1997: 419, 421)。

たち」「Mumbogo の子孫たち」が秘典に登場する。Swere リニジの農業儀礼家集団は Bumbogo 地方の、Base 川と Nyabarongo 川のあいだの Huro に自分たちの王国を持ち、Tsoobe の儀礼王の下にありながら彼ら自身の王と王母と宮廷儀礼家を擁し、王は Kalihejuru という王権太鼓を持ち、Nyamurasa、Musana、Mumbogo という王号を使ったという (Kagame 1947: 368, note 9; Delmas 1950: 107)。これら 3 つの王号のうち、Musana と Munbogo は農業儀礼家集団の名祖として王朝秘典に出てくるが、Nyamurasa という名前は出てこない。

Kagame によると、「Myaka の子孫たち」の名祖である Myaka (「年、収穫」の意) をさらに遡った祖先に、Buha (ブルンジの東南、タンザニア西部にあった小王国) から来た Gihe (「時間、季節」の意) という伝説的な人物がおり、彼がルワンダにソルガムをもたらししたといわれる。このため「Myaka の子孫たち」は初穂儀礼用のソルガムの種を播く資格があったという (Kagame 1959: 64, note 1)。「Myaka の子孫」は初穂儀礼以外にも、「水飼いの道」223、「戦争の道」29 で蜂蜜や蜂蜜入りビールの提供、「水飼いの道」923、「即位の道」900 で王の播種儀礼の補佐をするが、それらの多くで「Mumbogo の子孫」とペアで出てくる (宇野 2014: 148; d'Hertefelt & Coupez 1964: 158-159; 宇野 2015a: 130; 宇野 2013: 116)。Myaka の別名とされる Musana は「初穂の道」にのみ登場する。

## 5. 「初穂の道 (*Inzira y'umuganura*)」の訳と解説

ここでは「道」を訳すだけでなく、Bourgeois が記録した情報も要約する。Bourgeois は 1932 年 4 月にルワンダの地方行政官になった (Heremans, Bart & Bart 1982: 26) ので、宮廷の初穂祭や Bumbogo での準備を実際に見たことはなく、また「初穂の道」も知らなかったはずであるが、彼は明らかに Bumbogo 側のインフォーマントに取材しており、宮廷中心の「初穂の道」を補う Bumbogo から見た詳細情報を記録しているからである。



## 5-a. 畑の準備

Bourgeois によると：

畑の最初の耕作（地方の秘伝的な用語で *gusezera*<sup>15</sup> と呼ばれた）は Munanira 丘の特に Huro 部落で行われたが、そこは Ega クラン Swere リニジの王たち (*bami*) の首都であり、ルワンダ王 Kigeri IV Rwabugiri の王母 Nyirakigeri (Serutaganya 某と関係したと告発され、愛人と一緒に家に火をつけて自殺した) の屋敷のあった所である。初耕は7月初めに、Ega-Swere の人々が行った。以後、雨季の初めの播種の時期まで、藪に火をつけることは禁じられ、違反者は殺された (Bourgeois 1957: 420)。

これに対応する部分は「初穂の道」にはない。

## 5-b. 鋤の支給

Bourgeois によると：

土を耕し終わると、Ega クラン Swere リニジのフツの王 (*mwami muhutu*) は、象徴的な播種に使う鋤をルワンダ王に貰いに行くときに持参する蜂蜜ビールを準備した。7月中にフツ王は、自分のオジー人と Zigaba クランの儀礼家 (*umwiru*)<sup>16</sup> に 20 甕ほどの蜂蜜ビールを持たせて都へ派遣した。Ega-Swere の王と最初の移民クラ  
ン<sup>17</sup> の一つとの結びつきは驚くべきことではない。これは死者崇拜と関係があり、家の敷地の選択でもこの結びつきが出てくるだろ

---

<sup>15</sup> *Gusezera*: 辞書では動詞-*seezer*-に、「森の周囲の雑草低木を刈り取って防火線を作る」の意味がある (Coupez *et al.* 2005: 2147)。次に出てくる藪に火をつけることの禁止と関係するか。

<sup>16</sup> Ega クラン Swere リニジのフツ王の宮廷に Zigaba クランの儀礼家がいいたということ。その解説が次の文章で行われる。

<sup>17</sup> 最初の移民クラン (*premiers clans d'immigrants*)：ルワンダの支配層であるツチが来る前に移住してきていたフツの諸クランという意味で、Zigaba クラン、Gesera クラン、Sindi クランを指す (Bourgeois 1954: 47)。神話的な表現では、*ibimanuka* (天から降りてきた人々) に対する *abasangwabutaka* (地上にいた人々) である。

う<sup>18</sup>。使節団は、宮廷に着くと、まず、都に常駐している Bumbogo 省長官の Tsoobe クランの長 (chef) の所に行く。この長は Tsoobe の王 (*mwami mutsobe*) とは別人である。後者は一族の領地にいる。Tsoobe クラン長はルワンダ王に 10 甕のビールを持って行き、残りの 10 甕を自分用に取り。ルワンダ王は莫莖の上に置いたストゥールに座り、王の前に跪いたツツ王の儀礼家が新品の八つの鍬と八本の柄を倉庫保管係から受取る。これらの鍬は Buberuka の Cyungu 丘で王家の鍛冶集団 Bahinda が作った。儀礼家がルワンダ王に「豊穡の呪符 (*ikibibiro*)<sup>19</sup> のためにビールを下さい」と頼み、貰うと礼を言う。王は「耕作が有益であるように」と言い、儀礼家は「あなたのための生産でありますように」と答える。鍬は小さな莫莖で包み、紐で縛ってある。この紐は搾乳時に雌牛の後ろ足を縛ったり、王権太鼓を Cyirima 祠の柱に固定したりするときを使う紐に似ている。使節団は鍬を持ち帰る時、Nyabarongo 川を渡るのに、Gikingo の丘のふもとの Gisizi の渡ししか使わない<sup>20</sup>。これ以降、シコクビエの発芽前に、Tsoobe たち以外の誰も Bumbogo の禁止区域に入ることはできない。この地域の住民はシコクビエやソルガムの粥や穀粒を持って域外に出ることはできない。これに反すると死刑になる。この禁止はルワンダ王が初穂儀礼を完了した後でなければ解かれぬ (Bourgeois 1957: 420–422)。

<sup>18</sup> この「結びつき」は *umuse* 関係を指し、ルワンダに先着していたとされるクランが後着のクランに対して保護者となり、土地やそれに結びついた死者の呪力を無害化してやった。ここでは Ega クランの王に対して Zigaba クランの儀礼家が呪術的な保護者の関係にあると言っている。「初穂の道」129–130 に、Bumbogo の一行は「良いクランの家」つまり「Gesera クランか Zigaba クランの家」に泊まるとあるが、これは *umuse* の保護者クランのことである。*umuse* について詳しくは宇野 2007: 131–132 を参照。

<sup>19</sup> 豊穡の呪符の説明は後出 (播種の項)。

<sup>20</sup> 「Gisizi の渡し」：Nyakavugo 川の河口近くの Nyabarongo 川西岸の地名。「水飼いの道」693–694 で、王位継承予定者の一行がここでニガウリ (豊穡・勝利の象徴) を収穫し、Nyabarongo 川を渡る。-*siizi* 「液体が多量にある」との言葉遊びが「火の道」220、「水飼いの道」441–444 などでも繰り返し出て、ルワンダの豊かさの象徴となる (宇野 2014: 160; 宇野 2015a: 112; 宇野 2015b: 93)。

Tsoobe の王の所に立ち寄った後、使節団は Ega-Swere の王に鍬を差し出す。フツの王は注意深く鍬と柄が新品で *isugi* (欠陥がない) かどうか調べ、四本の鍬を自分のために取り、残り四本を Zigaba クランの儀礼家に与える。二人はそれぞれ儀礼的な播種に使うために一本を自分用に取りのけ、三本を自分の親族に与える。Tsoobe の王は鍬を包んであった莫莖と紐を都に送り返す (Bourgeois 1957: 422)。使節団が戻ってきた後、Bungogo の禁止区域の住民は、バナナ、たきぎ、インゲンマメ、瓠などの貢物を Huro 丘の王と王母 Ny-irakigeri に持っていく。Tsoobe たちは *Abalita* と呼ばれる彼らの牛たちを *Isanga* という名前のもとの差し出す (Bourgeois 1957: 422)。

「初穂の道」は鍬の支給から始まる。その時期は Bourgeois の説明より一ヶ月遅い。

#### [1-27: 鍬をルワンダ王から貰ってくる]

初穂儀礼 (*umuganur*) は *kaanama* 月<sup>21</sup> のうちに始まる。

始めるのは Myaka の子孫たち (203, 209)、

つまり Musana の子孫たち (20, 28, 76, 102, 104, 246) だ。

彼らは鍬を要求しに来て

[5] 彼らを監督する Tsoobe<sup>22</sup> に、

宮廷に行くように言う。

王は主殿<sup>23</sup> に座っている、

そこには彼の父、あるいは彼の祖父が祀ってある。

彼は家の中心に座る、

<sup>21</sup> [1]「*kaanama* 月」：ルワンダ陰暦十二月。西暦 8, 9 月頃。大乾期の最後の時期に当たる。

<sup>22</sup> [5]「彼らを監督する Tsoobe」：ここと 18 行目の Tsoobe は Tsoobe の儀礼王ではなく、Bourgeois の言う「都に常駐している Bumbogo 省長官の Batsobe クランの長」であろう。

<sup>23</sup> [7]「主殿」*kambere*：王宮の正門の内側に建てられた大きな建物で、王の睡眠や高官の謁見に使った。Lugan によれば、二十世紀初めの Musinga 王の Nyanza の王宮の主殿は直径 14–16 m あり、先代の Kigeri IV Rwabugiri を祀り、王母の睡眠場所でもあったという (Lugan 1980: 101–102; Lugan 1997: 197–198; Pagès 1933: 386)。

[10] 王座のストゥールに。

Tsoobe が鋤を持ってくる<sup>24</sup>。

Umwifuuzo の木<sup>25</sup> で柄を付けた、

まだ土に触れたことのない<sup>26</sup> Buberuka の鋤<sup>27</sup>、

莫塵に包まれているのを、

[15] Tsoobe がほどく。

王が鋤を取り、

自分の前で持ち、

Tsoobe に渡す、

こう言いながら：「耕しに行き、収穫を得よ」。

[20] Musana の子孫（3）がそれらを再び莫塵に包み、

それらを持って主殿を出る。

王宮外苑に来たら、

彼はそこにいる者に鋤を渡し、

すぐ後で出発する。

[25] Bumbogo の家に戻ると、

太鼓たちが出迎え、歓声上がる。

牛飼いの火を焚き<sup>28</sup> ながら「鋤たちが着いた」と言う。

---

<sup>24</sup> [11] 「Tsoobe が鋤を持ってくる」：ここ 15 行目の Tsoobe は Tsoobe の儀礼王。

<sup>25</sup> [12] 「*umwifuuzo* (-ifuuzo 3,4)」：ルワンダ西部の Gisenyi, Cyangugu, Kibungo などの地方に見られるウルシ科 (Anacardiaceae) の喬木 *Pseudospondias microcarpa* (A. Rich) Engl. (Troupin 1983: 295; Coupez *et al.* 2005: 1001)。名前の -ifuuzo は動詞 -ifuuz- 「欲する」と掛けられる。

<sup>26</sup> [13] 「まだ土に触れたことのない」：土は儀礼的観点からは不浄と見なされ、例えば王権太鼓も直接に地面には接触させない。この鋤も単に新品であるだけでなく、儀礼的に清浄な鋤であることが強調される。

<sup>27</sup> [13] 「Buberuka の鋤」：Buberuka は Byumba 県と Ruhengeri 県にまたがる地方。西の Burera 湖と Ruhondo 湖、北東の Rugezi 沼、南の Kabuye 山地と Mushongi 山地の間の山がかった地方で、Mushongi 山地の Nganzo に王家の鉄鋤山があった (d'Hertefeldt & Coupez 1964: 448, 477)。

<sup>28</sup> [27] 「牛飼いの火を焚く (*bagacaanira*)」：屋敷の庭などで牛をアブや蚊から煙で守るために火を焚く (Coupez *et al.* 2005: 291)。牛飼いの炉は、早朝、搾乳の前から牛を牧草地に行かせるまでと、夕方、牛たちが家に戻る頃から搾乳が終わるまで焚いた (Kagame 1952: 109)。

### 5-c. 播種

Bourgeoisによれば:

ルワンダでは、高地で9月、10月に植え、3月、4月に *amahore* という名で収穫される早生のソルガムを使って宮廷の初穂の年祭が行われた (Bourgeois 1957: 607)。

播種 (*kubiba*) は地方の秘伝的な表現では *guturutsa* と言う<sup>29</sup>。Ega-Swere のフツ王がみずから Huro の彼の家で最初の種まきの合図をする。彼は、夜のうちに、彼の家族と儀礼家たちに助けられて、1平方メートルほどの狭い面積にソルガムとシコクビエと *isogi* とヒョウタンの種を蒔く。翌日、Zigaba クランの儀礼家の家でも同じことをする。その時、鋤の到着後にもたらされた貢物を消費し、*Ab-alita* 牛たちを搾乳し、牛乳を飲む。Ega-Swere のフツ王と儀礼家たちだけがこの宴会に参加する。播種は雨期の始まる9月～10月 (*nzeri* 月) に行われる。畑の真中に置かれる豊穡の呪符 *ikibibiro* はフツ王が持っている。それはカオリンを塗った *igicuba* 牛乳壺で、中に上記の四種の種を入れ、ラセン模様の円錐形の籠細工の蓋をして、バナナの葉で編んだ輪の上に置かれる (Bourgeois 1957: 422–423)。

播種の直後、人々は歓声を上げ、太鼓を叩き、フツ王は、ルワンダ王から特に各治世の初めに名誉のしるしとして与えられる女性と儀礼的性交をする。この女性は最初の移民クランの出身であり、Ruganzu II Ndori に罰された Bacuku がルワンダ王の即位毎に Bum-

<sup>29</sup> *Guturutsa*: 動詞-*turuts-*は、辞書には「季節で初めて12月～1月のソルガム (*amaaka*) を播種する」とある (Coupez *et al.* 2005: 2652)。もしこの意味で Bumbogo のインフォーマントが言ったとすると、インフォーマントが知っていた少なくとも末期の宮廷儀礼は、「初穂の道」のように9～10月蒔きのシコクビエに合わせた日程ではなく、ソルガム・プロパーの12月～1月蒔きのサイクルに対応したものだった可能性がある。しかし、このすぐ後で Bourgeois は播種が *nzeri* 月 (西暦9～10月) に行われたと書いているので、矛盾する。この問題は次節で論じる。

bogo に嫁がせて初穂祭の作物を作らせたという娘かもしれない<sup>30</sup>。  
Zigaba の儀礼家も彼の妻と性交する。この儀礼は *kwakir'ikibibiro*  
「豊穡の呪符を認可する」と呼ばれる (Bourgeois 1957: 423)。  
一般人は、上記の小さな畑に蒔いた種が発芽して初めて種を蒔くこ  
とが出来る。そのことは Ega-Swere リニジのフツ王の十の太鼓を  
叩いて知らせる (Bourgeois 1957: 423)。

「初穂の道」でもソルガムとシコクビエを *nzeri* 月に播種するが、記述は  
非常に簡潔である。

#### [28-33: 播種]

Musana の子孫たちが  
沼の縁に行き、(ソルガムの) 種を播く。  
[30] 翌日、また播く。  
その後は(普通に) 農作業する。  
この時、*nzeri* 月<sup>31</sup>である。  
シコクビエも同じ時に播く。

#### 5-d. *Umurorano* (作柄標本) の収穫と儀礼

Bourgeois によれば:

Huro では、Ega-Swere のフツ王が、未熟なままで収穫したシコク  
ビエとソルガムの入った約 20 kg の荷物を 4 月 (*werurwe* 月) のう

---

<sup>30</sup> 伝説によれば、Ruganzu II Ndori 王が Kivu 湖の東南に遠征した際、Bukunzi-Cyangugu 地方の Cuku リニジの住民が Ruganzu の牛を盗んで食べた。その罰として Cuku リニジは女(ないし女とその娘。娘の父親は Cyaba クランでなければならぬ)をルワンダ王に差し出し、女(ないし Cyaba の娘)は Bumbo-go に嫁いで初穂祭用のソルガムとシコクビエを栽培した上に、Cuku リニジは毎年の初穂祭のポレンタを作る石臼、土鍋、スパチュラを宮廷に提供したといわれる (Pagès 1933: 294-297; Bourgeois 1957: 139)。なお、Cuku という名のリニジは Sindi クランと Gesera クランの両方にあり、両方とも Cyangugu にいる (Nyagahene 1997: 293, 358)。

<sup>31</sup> 陰暦一月、西暦 9~10 月。

ちに準備させる<sup>32</sup>。この収穫は *umurorano* (<動詞 *kurora*:「初めて見る、発見する」) と呼ばれる。荷物は Tsoobe 王の都である Ru-koma の Kinyambi に運び、そこからフツ王と Tsoobe 王がルワンダ王の宮廷に赴き、都に常駐する Tsoobe の長が初穂をルワンダ王に差し出す (Bourgeois 1957: 423–424)。

*Umurorano* をルワンダの都に運ぶ前に、Tsoobe の王の所でも Ega-Swere の王の所でも、ニワトリの内臓を使った占いをする。次にこれらの王の祖先祭祀を行い、シコクビエを火に投げ込むが、そのぱちぱちいう音が吉兆なのである。同様にルワンダ王の所でも占いと祖先祭祀、特に Cyirima II Rujugira<sup>33</sup> の祭祀を行う。初穂を受取る前に、ルワンダ王は、Ega クランの Kongori リニジ<sup>34</sup> と Singa クランの Cumbi リニジ<sup>35</sup> のお祓い師によって、聖水散布具 *icyuhagiro* とカオリンを使って清められる。この散水具は吉相の植物 *ikibonobono*、*umucoro*、*umutabataba*、*urugarura*、*imposha*、*umuko*<sup>36</sup> の枝でできており、清浄な水を入れたヒョウタン製容器に浸す。お祓い師の一人が

<sup>32</sup> 実際には、*nzeri* 月から、*ukwaakira* 月、*ugushyiingo* 月、*ukubozza* 月、*mutarama* 月、*gashyaantare* 月、*weerurwe* 月で六ヶ月経っており、早生 (*amahore* 作) のソルガムの収穫期が来ているから、それほど未熟ではなかったろう。「初穂祭プロパーのための収穫に先立って早めに刈りとった」という程度の意味であろう。

<sup>33</sup> Cyirima II Rujugira は 18 世紀ころのルワンダ王。植民地時代初期の宮廷祭祀における彼の位置については、宇野 2015a: 116 注 22 を参照。

<sup>34</sup> 「Ega クランの Kongori リニジ」: 「初穂の道」をはじめ秘典には登場しないこのリニジは、ルワンダ宮廷の占い師・除厄師を供給した (Delmas 1950: 118, 131–133; Pagès 1933: 390; Bourgeois 1957: 23–24)。王の唾液を使う占い師はこのリニジのツチからのみ選ばれたといわれる (Arnoux 1918: 6)。Nyagahene (1997: 422) の 1980 年代後半の調査では、このリニジはフツが 12%、ツチが 88% だった。

<sup>35</sup> 「Singa クランの Cumbi リニジ」: 悪霊払い・敵の無力化を専業とする下級儀礼家を王室に供給した (Delamas 1950: 162–164; Pagès 1933: 391; 宇野 2007: 131)。

<sup>36</sup> 「吉相の植物」: *ikibonobono* はアカネ科の低木 *chassalia subochreate* または同科ボチョウジ属の数種の高木 *psychotria div. Spp.* (Troupin 1985: 153, 206)。umucoro は不詳。umutabataba は *umutaba* とも言い、クワ科イチジク属の木 *ficus ingens* var. *ingens* (Troupin 1978: 146; 宇野 2012: 52; 宇野 2014: 146)。urugarura はシソ科の草 *aeollanthus repens* (Troupin 1985: 300)。imposha は水飼いの槽に生える苔で、動詞 *guhosha* 「終わらせる、やめさせる」と掛けられる (Bourgeois 1956: 279)。umuko は「初穂の道」55 の訳注参照。

ヒョウタンを十字架のように王に押し付け、次のような呪語を唱える：右肩で「肩よ、敵に施せ」、左肩で「凌駕出来ない王よ、敵を凌駕せよ」、額で「指揮するあなたはすべての牛、全ての戦士を指揮する」、胸で「胸よ、あなたは常にルワンダにいる」。ヒョウタンを置いて、お祓い師は聖水散布棒を使って、王を祓い、彼についている悪運——有毒な瘴気のような——を排除する。王は額と胸にカオリンで触れられる。額には「あなたは不死身で、敵は到達しない」、胸には「胸よ、ルワンダを支配せよ」と言いながら。初穂を受取ると、王はそれを *abanyamuheto*（「弓の者」）という信頼できる侍女たちの一人に渡すが、彼女は *isugi*（子供を亡くしたことがない）でなければならない。彼女は Kwa Mbungira と呼ばれる炊事場で製粉し、粥（*bouillie*）を作る。湯が沸騰すると、Ega-Swere の王、Tsoobe の王、そしてルワンダの王が粉を投げ込む。彼らはスパチュラを右手に持って、何も加えないで練る。よく煮えると、粥は澄んできて、*ingezi*（＜*urugezi* 「川」）と呼ばれる。用意できると、ルワンダ王は Cyirima 王祠<sup>37</sup>に行き、その寝台に座る。彼の三人の炊事係＝侍女、料理人、Tsoobe の長が清浄な藤の皿に粥を少しのせて持ってくる。いつものように、王は一人で食べる。満腹すると、彼は他の二人の王にもペーストを食べさせる。Tsoobe の王はルワンダ王の小屋の間仕切り（*insika*）の後ろの控えの間で待っている。Ega-Swere の王はフツだから常に離れている。食べたらずぐ、ルワンダ王は彼の妻の一人と、*kwakir' umurorano*（「*umurorano* を受けてる」）と呼ばれる儀礼的な性交をしなければならない。これは、王権太鼓や王家の宝が置かれ、Cyirima Rujugira 王の霊にささげられた小屋で、この先祖のために王が娶った女性と行わなければならない。Musinga 王の時代

---

<sup>37</sup> 王宮の Cyirima 祠には王権太鼓が保管されている。



には、この妻は chef Rwigemera の母 Nyirakabuga<sup>38</sup> だった。これは性交の模擬行為で、もし王が実際にやりたかったら後でしなければならいと言われる。他の二人の王は、妻ないし一時的な相手と儀礼的性交をする。彼らの太鼓は Bumbogo にとどまり、umurorano に付いて行かない (Bourgeois 1957: 424-426)。

「初穂の道」の umurorano の説明は Bourgeois のとはかなり違っている。

[34-47: umurorano をルワンダ宮廷に送る]

Mutarama 月<sup>39</sup>に、

[35] 鎌たちは熟している<sup>40</sup>。

月の闇 (imyijima) の時期<sup>41</sup>に

Umuroranno が着く。

Inkangara 籠<sup>42</sup>に一杯分のソルガムだ。

シコクビエも少しある。

[40] 王宮の主殿に入れる。

Tsoobe が仕切り壁 (inzuugi)<sup>43</sup>の後ろに置く。

王が出てくる。

<sup>38</sup> chef Rwigemera Etienne は Musinga 王の子。その母 Thérèse Nyirakabuga は Ega クラン Kagara リニジの人。彼女の父は Cyigenza (Kigenza)、祖父は Rwakagara。この祖父の子供には、彼女の父の他に、Musinga 王の母 Kanjogera、その兄で Rucunshu のクーデタを起こした Kabare、さらにその弟の Mbanzabigwi などがいた。Mbanzabigwi の子供には、Musinga 王の政敵 Kayondo や、その妹で Musinga 王の後継者 Mutara III Rudahigwa (在位 1931-1959) を産んだ Kankazi などがいた。Kankazi も Nyirakabuga も Musinga 王の母方イトコにあたる (Delmas 1950: 91, 125-126, 209-210; 王の母方イトコ婚については、宇野 2007: 134 以下を参照)。

<sup>39</sup> [34] 「Mutarama 月」: 1~2 月。

<sup>40</sup> [35] 「鎌たちは熟し (-er) ている」: 作物が熟しているの意。実際には蒔いて四か月なので、完熟はしていない。

<sup>41</sup> [36] 「月の闇 (imyijima) の時期」: 日没時に月が出ていない陰暦月の後半。

<sup>42</sup> [38] 「inkangara 籠」: 円筒形の竹製籠。底がややつぶれた偏球面で、上に行くほど狭くなる。円錐形と半球形の蓋がある。食料や衣類をしまったり、運んだりする (Coupez et al. 2005: 1219)。

<sup>43</sup> [41] 「仕切り壁 (inzuugi)」: (-gi の pl.) 家の入口を閉じるのに使う筵状のもので、入口の柱に結び付ける。あるいは竹で編んだパネルで、柱の間に押し込んで仕切りにする (Coupez et al. 2005: 598)。

家の中にいる全員を追い出す。

王が席につく

[45] Tsoobe が王に上記 (38) の *inkangara* 籠を差し出す

王がそれに触れる (*akayikora*)。

次に王母が触れる。

[48-72: *umurorano* のペーストの目視と豊穡儀礼]

それを家に運ぶ、

離れている、裏庭 (*gikaari*) にある家に。

[50] すり臼 (*urusyo*)<sup>44</sup> を運んできて挽く。

粉が出来たら、湯を沸かし、

二つの *icyibo* 籠<sup>45</sup> のなかで練る (*bakavuga*)。

パピルス (*ingore*) 製の小さな籠だ。

夜、牛軍「尊敬すべき者たち」<sup>46</sup> を呼んで、

[55] エリスリナ<sup>47</sup> 製の *inkongooro* 壺<sup>48</sup> に牛乳を入れて持ってこさせる。

主殿に皆で入る。

宮廷儀礼家 (*aabiiru*) でないものは追い出す。

<sup>44</sup> [50] 「すり臼 (*urusyo*)」: 雑穀は木製の搗き臼 (*iisekuru*) と杵 (*urusekuzo*) で脱穀して、石製のすり臼に乗せてすり石 (*iingasiire*) で粉にする (Pauwels 1955: 291, pl. 33, fig. 211, p. 213; Pauwels 1969: 86, fig. 9, p. 95, fig. 18)。

<sup>45</sup> [52] 「*icyibo* 籠」: 葦とパピルス皮で作った円筒形の籠で、料理済みの食糧を入れる (Coupez *et al.* 2005: 986)。粉は籠の中で練るだけで煮てないことに注意。

<sup>46</sup> [54] 「尊敬すべき者たち」(*Iinyubahiro*): Cyirima II Rujugira が作ったと言われる。この牛軍および牛軍 *Insanga* (351 行目) は Heeka リニジが管理し、この牛軍で王権雄牛を育て、「即位」させた (Kagame 1961: 12-13, 41-42; Kagame 1947: 369; Kagame 1963: 16-18)。

<sup>47</sup> [55] 「エリスリナ (*umuriinzi*)」: *umuko* ともいう。マメ科の *Erythrina abyssinica* で、高さ 2-10 m、ルワンダのどこにでも見られ、垣根や木陰用に植えられ、材木は軽く、多孔質で、容器 (壺、皿、小箱) や太鼓に使われる (Troupin 1983: 83-84)。枝にトゲがあり、花は赤い (Coupez *et al.* 2005: 1309)。Ryangombe が水牛に突き殺されたとき、この木にしがみついたとき、Ryangombe 祭祀で守護者の象徴として使われる。

<sup>48</sup> [55] 「*inkongooro* 壺」: *-koongooro* 9, 10. 「少量のミルクを飲んだり、乳量が多くない雌牛を搾乳するのに使う小型の木製壺」 (Coupez *et al.* 2005: 1348)。

王は見る (*akarora*)<sup>49</sup>、

四回。

[60] そして彼の Ega クランの妻<sup>50</sup> も、

—彼女は月経中でない—

四回見る (*akarora*)。

上記 (52–53) の小さな *icyibo* 壺たちを *igicuba* 壺<sup>51</sup> に入れ、

寝台の棚<sup>52</sup> (*musego*) に置く、

[65] 王権金槌 Nyarushara<sup>53</sup> の後ろの。

夜、王は行為をする。

Lintarindwa 軍<sup>54</sup> (229) のフツが、

王の起床の太鼓を待って、

上記の *igicuba* 壺 (63) を空にし、

[70] ペーストを持って行って食べる。

そのままでいる、

月の終わりまで。

<sup>49</sup> [58, 62] 「見る (*akarora*)」: 52 行目で粉を練った二つの *icyibo* 籠の中を見るの  
だろうが、見るだけで、中の物を食べるとは言っていないことに注意。

<sup>50</sup> [60] 「彼の Ega クランの妻」: 上記の Bourgeois の説明中の chef Rwigemera の  
母 Nyarikabuga に相当する。

<sup>51</sup> [63] 「*igicuba* 壺」: 牛乳を貯蔵したり水を汲んだりするのに使う数リットル入  
りの大きな木製の壺、あるいはそれより小さい牛乳入れの壺 (Coupez *et al.*  
2005: 324–325)。

<sup>52</sup> [64] 「寝台の棚 (*musego*)」: (-*sego* 3, 4) 寝台の上部が伸びて棚になっている  
(Coupez *et al.* 2005: 2115)。

<sup>53</sup> [65] 「王権金槌 Nyarushara」: Nyarushara は王権金槌の筆頭で、毎夜、王はこ  
れを枕の下に敷くか、寝台に隣接する棚に置いて寝た。そして毎朝、王の起床  
の太鼓が鳴る時に、王は王権金槌に触れなければならなかった (Pagès 1933:  
494; Delmas 1950: 40; 宇野 2013: 94, note 21; 宇野 2014: 137, note 64)。

<sup>54</sup> [63] 「Lintarindwa 軍」: (-*tarindwa* 9,10) 「近寄り難い者たち」の意。Cyirima II  
Rujugira が作った軍で、北部や東部の辺境に駐屯したが、19 世紀にツチ (戦  
士) 部門がなくなり、残ったフツ部門は宮廷の雑用をするようになったという  
(Kagame 1963: 104–106; d'Hertefelt & Coupez 1964: 462)。宮廷で占いのための  
動物を殺す仕事をした人 (Coupez *et al.* 2005: 2456)。次の節で Bourgeois は  
「宮廷の屠殺人」と呼んでいる。

Bourgeois と「初穂の道」では、まず、*umurorano* の儀礼の実施月が違う。また、Bourgeois は王たちが粥作りに参加し、粥を食べたとするが、「道」では王たちは荷の到着時に *umurorano* の入った *inkangara* 籠に触るだけで粥作りはしないし、湯で練った粉を「見る」だけで食べない。58、62 行目の動詞「見る」-*ror*-は、*umurorano* の語幹をなす動詞（Bourgeois の説明の *kurora* 「初めて見る、発見する」）で、より具体的には-*reeb*-「目を凝らして見る、観察する、調べる、確認する」の意味である（Coupez *et al.* 2005: 1982, 1876）。Bourgeois が *umurorano* 儀礼をもっぱら豊穡の予祝として描写しているのに対し、「道」には、予祝だけでなく、送られてきた作物の点検の側面が強く出ている。これらの問題は後で詳しく扱うことにして、次に進もう。

#### 5-e. *Igitenga* 籠の往来と初穂の搬送

Bourgeois によれば、

*umurorano* の儀式の後、収穫が行われる。ルワンダ王は Bumbogo の使節団に、Cyirima 祠で王権太鼓の近くに置かれていた高さ 1.6 m、幅 3 m の非常に大きな *igitenga* という名の籠を渡す。この籠はハンモック (*ingobyi*) に載せて運び、道中で一泊しかできず、Nyabarongo 川は Gisizi でしか渡れない。Bumbogo に着くと、*igitenga* 籠は収穫したシコクビエとソルガムで満たされるが、あまりにも重くて籠に入れたままでは運べないので、運びやすいように小分けし、蜂蜜ビールの甕と共に都に運ばれる。ビールの甕の一つは *Rugina* と呼ばれ、Ega-Swere 王によって提供される。もう一つの *Rurara* は彼の主人（Tsoobe の王）が提供し、さらに 200 甕ほどを区域内に住むフツたちが提供する（Bourgeois 1957: 426）。

都に出発する際、Huro の Jondi 集落まで、Ega-Swere 王の太鼓たちを鳴らして空の *igitenga* 籠をエスコートする。帰路も籠は途中で一泊しかせずに、都に常駐する Tsoobe の長の所に着かなければな

らない (Bourgeois 1957: 426)。

その途上で、Kinyambi (Rukoma) にある Tsoobe の太鼓 Baruhirubusa が連打で籠に挨拶する。翌日、都の Tsoobe の長の家に着くと、籠はルワンダ王の通常の太鼓たちの連打によって祝われる。籠を運んだ Bumbogo の儀礼家たちは食用の雄牛を一頭もらう。この牛は畜群 Indwanyi (肉屋の)<sup>55</sup> から Niginyina クランの Abanana リニジの長 Nturo<sup>56</sup> が連れてくる。14 時ごろ、王権太鼓 Kiragutse<sup>57</sup> のハンモックが運ばれて来ると、そこに *igitenga* 籠を置き、その周りに *umwishywa*<sup>58</sup> の花飾りを付けたのち、Bumbogo から来たソルガムとシコクビエを詰める。ついで宮廷の屠殺人たち *Intalindwa* がそれを引き受ける。これ以後は専門家だけが儀礼に参加でき、外国人、女性、犬などは籠に近づけない。籠は、王の普通の太鼓たちの連打のなかで、正装した重臣たちに見守られて、荘重に王の屋敷まで運ばれる。Cyirima の霊のために娶られた妃とハンモックに載せられた Karinga 鼓とがそれを迎える (Bourgeois 1957: 427)。

*Igitenga* 籠の搬入後、王と重臣たちの酒盛りが始まり、夜中続く。翌朝、Bumbogo から来た人々のために、王の食肉用家畜群から Nturo が選んだ二頭の不妊の雌牛と二頭の雄牛が殺される。屠殺は初穂儀礼を行うのに吉と占われた場所で行われる (Bourgeois 1957: 427)。

---

<sup>55</sup> Indwanyi はルワンダ宮廷に食肉を供給する畜群の名前。「初穂の道」347 の「戦う者たち」を参照。

<sup>56</sup> Delmas によると、Cyirima II Rujugira の子孫に Banana リニジがあり、1950 年頃の現役首長の親の世代に Paul Nturo という人がいた (Delmas 1950: 69)。それがこの Nturo かどうかは不詳。Nyagahene の Nyiginyina クランのリニジ・リストには Abanama はあるが、Ananana はない (Nyagahene 1997: 494)。

<sup>57</sup> Kiragutse は、19 世紀末～20 世紀中頃にあった四つの王権太鼓のうちで最も若い太鼓で、Kigeri IV Rwabugiri が作った (宇野 2011: 97)。

<sup>58</sup> *-iishywa* 3, 4 はウリ科のニガウリ (*Momordica charantia et foetida*) で、花は緑 (*charantia*) ないしオレンジ色 (*foetida*) (Troupin 1983: 462; Coupez *et al.* 2005: 1083)。

Cyirima 祠で働く儀礼家が規則通りの手順で牛が殺されるよう監視し、血を集めて Karinga 鼓に塗る (Bourgeois 1957: 427-428)。ルワンダ宮廷での行事が増えるにつれて、「初穂の道」は、Bourgeois の説明と大筋で補完し合いながら、詳しくなる：

[73-122: ルワンダ宮廷から *igitenga* 籠を Bumbogo に送る]

日にちを計算する、  
*gashyaantare* 月が現れる日<sup>59</sup>に、  
[75] *igitenga* 籠を取りに行けるように。  
Musana の子孫が「都に」到着し、  
Tsoobe に言う：  
「*igitenga* 籠を取りに来ました。」  
答えて言う：「よろしい」  
[80] Tsoobe は宮廷に知らせる。  
Ega の娘を捜す、  
Cyirima 祠へ行かせる娘<sup>60</sup>を。  
酸敗したバター<sup>61</sup>を持ってくる。  
上記 (81) の Ega の許嫁 (*umugeni*) が  
[85] 上記 (83) のバターを取って、  
*Igitenga* 籠の底に詰め、  
フツに渡し、彼は  
王のいる屋敷まで運ぶ。  
王の父の所か、祖父の所か、

<sup>59</sup> [74] 「*gashyaantare* 月が現れる日」：西暦 2 月～3 月頃。月の初めに出発する。

<sup>60</sup> [82] 「Cyirima 祠へ行かせる娘」：次からは「許嫁 (*umugeni*)」と呼ばれる。  
-*geni* 1,2 は「その日に結婚する娘」(Coupez *et al.* 2005: 576)。上述の Bourgeois の「Cyirima 王の霊のために娶られた妃」に相当。316 で王と儀礼的に性交する。

<sup>61</sup> [83] 「酸敗したバター (*amavuta y inturire*)」：料理に使い、特にツチはこれを好み、インゲンマメやグリンピースの味付けをしたりソースを作ったりする (Coupez *et al.* 2005: 2648)。

[90] どちらがよいか占う必要はない。

王は家の真ん中に座る。

王座のストウールに。

そこに羊の皮を結んである<sup>62</sup>。

その羊は、王がまだツチであったとき<sup>63</sup>、

[95] そして彼が即位した時に吉とされた。

なぜなら即位したら

羊の皮は着ず<sup>64</sup>、

牛の皮だけを着るから。

王の前に *igitenga* 籠を置く。

[100] 王が籠の縁を持つ、

Tsoobe と、

Musana の子孫に助けられて。

Tsoobe がまず頭を突っ込む<sup>65</sup>。

ついで彼は籠を Musana の子孫に差し出し、

[105] Musana の子孫も頭を突っ込む。

間仕切りの上を通して、

彼らは籠をフツの誰かに渡す。

そしてフツがそれを運ぶ。

その時、歓声が響き渡る。

[110] 侍女たちが付いて行く。

歓声だけで、太鼓はない。

---

<sup>62</sup> [93–98] 「羊の皮、牛の皮」：即位式への暗示は 192–193 にも出てくる。96 の「なぜなら」は 93 に掛かるらしい。

<sup>63</sup> [94] 「王がまだツチであったとき」：即位前を指す。即位するとツチ、フツと  
いった差異を超越した存在になる。

<sup>64</sup> [97] 「羊の皮は着ず」：しかし鍛冶儀礼をするときには着た：「太鼓に戦利品を  
飾る道」128 (宇野 2011: 108)、「即位の道」882 (宇野 2013: 115)、「水飼いの  
道」388 (宇野 2014: 158)、「火の道」127 (宇野 2015b: 86)。

<sup>65</sup> [103, 105] 「頭を突っ込む」：籠の内側の状態を確認する儀礼的動作らしい。

日を遅らせないで出発する、  
Tsoobe の宿に泊まらずに。  
すぐに出発する。  
[115] 泊まる場所はどこでも、  
通る丘はどこでも、  
歓声が上がる。  
川を渡る。  
到着までに、

[120] 計量籠をたくさん準備する。  
太鼓と歓声が、  
Bumbogo で *igitenga* 籠を迎える。

**[123-136: Bumbogo から初穂を都に運ぶ]**

その日に計って *igitenga* 籠を一杯にし、  
中身を計量籠に移し替える。  
[125] その日のうちに引き返す。  
道中ずっと歓声をあげながら、  
Bumbogo 人たちは盗んだり、  
人々を殴ったりする。  
泊まるのは良いクラン<sup>66</sup>の家、  
[130] つまり Gesera クランか Zigaaba クランの家だ。  
その宿は食料や贈り物を提供する。  
もし提供しなければ、その屋敷を打ち壊す。  
貢物に出くわしてさえ、  
宮廷に送られる途中の、  
[135] あるいは首長に届ける物資でも、

---

<sup>66</sup> [129] 「良いクラン」: *umuse* 関係のクラン。「鍬の支給」の Bourgeois の文と注を参照。



強奪しても文句は言われない。

[137-150: 都の Tsoobe の屋敷に初穂が到着]

Tsoobe の家で一泊する。

初穂の到着前に、儀礼への招待客 (*abakwe*) 選ばれる。

他所へ出かけたい人がいても、やめさせる。

[140] 首長たちはみな牛乳を取りに行かせる。

宮廷の *igicuba* 壺に牛乳を満たす。

籠が Tsoobe の家に到着するとき、

宿<sup>67</sup>に置かれたこのクランの太鼓が迎える。

そこに泊まる。

[145] 翌朝、Tsoobe が若い雄牛を連れてきて、

Bumbogo から来た人々に贈る。

宮廷の打奏用太鼓 (*ingoma z imivugo*) が

宿に来る、

王を起こした後で。

[150] 太鼓は到着すると、鳴らされる。

[151-159: 出発時のバターの準備]

真昼の太陽が輝き始めると、*igitenga* 籠は出発する。

この時、酸敗したバター (83) を

*Ikidakombwa* 壺<sup>68</sup>に入れ、

バター攪拌器を吊るすネット<sup>69</sup>にその壺を入れる、

---

<sup>67</sup> [143] 「宿」: Tsoobe の屋敷を指す。

<sup>68</sup> [153] 「*ikidakombwa* 壺」: (*-dakombwa* 7, 8) 非常に広口の壺で、初穂祭用だったらしい (Coupez et al. 2005: 376)。

<sup>69</sup> [154] 「バター攪拌器を吊るすネット (*njiishi y igisaabo*)」: バター攪拌器 (*-saa-bo* 7, 8) は、牛乳を入れてチャーニングしてバターを作るための大型のヒョウタンないし土器 (Coupez et al. 2005: 2047)。「初穂の道」の他に「即位の道」860、945 で喪明け儀礼と王国再生儀礼に使われる (宇野 2013: 113, 119)。*jiishi* 9, 10 は、バター攪拌器などを吊すのに使うネットで、漁網に似る。搾乳時に雌牛の後肢を縛ったり王権太鼓を Cyirima 祠の棚に固定したりする綱も *jiishi* である (Coupez et al. 2005: 1152)。

[155] 手摘み<sup>70</sup>の *urukangaga* 草<sup>71</sup>で編んだ台座の輪 (*urugata*) とともに。

バターは *ikidakombwa* 壺 (153, 159, 292) に満たす。

バターは *Cyirima* 祠に運ばれ、

そこで使われる。

*ikidakombwa* 壺は *igicuba* 壺のなかに入れておく。

#### [160–188: 王宮外苑への初穂の到着と出迎え]

[160] 初穂は出発する。

少年たちは皮の服を着ている。

招待客たちは *Tsoobe* の家で *igitenga* 籠を見る。

*Ega* の許嫁 (84) と

*Tsoobe* の許嫁<sup>72</sup>は

[165] *Cyirima* の所にいる。

太鼓たちを輿に乗せて運ぶ、

上席順に。

上記 (163) の *Ega* の許嫁が、

輿に乗って後に続く。

[170] *Tsoobe* の許嫁 (164) がすぐ後に続く。

上記 (159) の *igicuba* 壺もすぐ後に続く。

すべてが王宮外苑に到着する。

*Karinga* 鼓が初穂の行列と出会う。

*Karinga* 鼓の把手を持ち、

[175] 初穂の籠の把手も持ち、

---

<sup>70</sup> [226] 「手で摘む (*ubushikurano*)」: 草の儀礼的清浄性を確保するため、道具を使わず手で摘んだ (*d'Hertefeldt & Coupez 1964: 311 #155*)。

<sup>71</sup> [225] *urukangaga*: カヤツリグサ属の *Cyperus latifolius* Poiret、多年生草本植物、高さ 0.5–3 m、沼、湖岸、水に浸かった土地に生える (*Troupin 1987: 4469*)。それで編んだ台座に壺を乗せて安定させる。

<sup>72</sup> [164] 「*Tsoobe* の許嫁」: *Ega* の許嫁の補助的な存在として 170, 317, 329 に登場。

二つを絡み合わせ、互いに触れさせる。

Karinga 鼓が通り抜ける、

他の王権太鼓たちと一緒に。

太鼓たちは引き返し、

[180] 王のいる屋敷に行く、

上記 (168, 170) の許嫁たちの輿と共に。

上記 (171) の *igicuba* 壺は王宮外苑に残って、

白たち (*insyo*) が輿の後に続く、

Tsoobe の所から持ってきた白だ。

[185] そして Buhanga の二つの *intango* 壺<sup>73</sup>が、

上記 (182) の *igicuba* 壺とスパチュラ (*umwuko*) の後に続く。

許嫁たちの輿は、

主殿の屋敷塀の翼 (*nkik ikambere*) に置く。

王宮では王が威儀を正して初穂を迎える。即位式と重なる要素がここにも出てくる。

#### [189–207: Myaka の子孫が王に初穂を献上]

王に王権金槌と発火錐<sup>74</sup>を差し出す。

[190] 彼は主殿の入口で、

王座のストウールに座る。

彼は勝利のしるしの赤い首飾り (*inganji*)<sup>75</sup>をつけている。

<sup>73</sup> [185] 「Buhanga の *intango* 壺」：Buhanga はルワンダ北部の Ruhengeri 地方の平地で、Mukungwa 川の西、Nyamutera の北にある。ルワンダ王国の神話的始祖の Gihanga 王が住んでいたとされる (d'Hertefelt & Coupez 1964: 449)。-*tango* 9, 10 は非常に大きな土製の壺で、祭で大勢が飲むビールを作るのに使う (Coupez et al. 2005: 2438)。「初穂の道」ではここにしか出てこず、使途は不明だが、「水飼いの道」414 では湯沸かし、「火の道」178–208 では窯として使われており (宇野 2014: 159; 宇野 2015b: 90–92)、231 以下で湯を沸かす土鍋 (-*kono*) がこれかもしれない。

<sup>74</sup> [189] 「王権金槌と発火錐」：王権の象徴で、王と共に移動する。

<sup>75</sup> [192, 193] 「勝利のしるしの赤い首飾り (*inganji*)」「弓 (*umuheto*)」：どちらも即位式で新調され、王国と牛の再活性化儀礼で使われる (「即位の道」273, 292, 986, 987 [宇野 2013: 103, 104, 114 注, 121])。

弓が前に出て、

王に挨拶し、*igikondo* 輪<sup>76</sup>を彼にはめる。

[195] 王権太鼓たちが<sup>8</sup>入場する。

王が *ibihubi* のリズムで打った後、太鼓たちは王に差し出され、  
棚に行く。

初穂の列が入場する。

王は腰に初穂の腰蓑<sup>77</sup>をつける。

[200] *Igikondo* 輪 (194) とウサギの尻尾<sup>78</sup> も。

初穂の行列が入口の庇の支柱<sup>79</sup>に

到着しかかると、

*Myaka* の子孫を連れに行く。

彼はバター攪拌器用のネット (154, 293) を頭に乗せ、

[205] *igitenga* 籠を頭に乗せる。

彼は水辺で滑降し、戻ってくる<sup>80</sup>。

次いで王の前に *igitenga* 籠を置く。

## 5-f. *Umuganura* (初穂祭)

ルワンダ王宮での儀礼についての Bourgeois の記述は短く、Bumbogo の下

<sup>76</sup> [194] 「*Igikondo* 輪」: (-*kondo* 7, 8) マメ科の草 *umuharakuuku* の繊維で編んだ小さな輪で、回りを草の皮で巻いてある。有害な霊を祓ったり種子の豊穡を確保したりする呪符として使われた (d'Hertefeld & Coupez 1964: 312)。

<sup>77</sup> [199] 「初穂の腰蓑 (*inyonga z umuganura*)」: 「即位の道」868 (宇野 2013: 114) で王国を甦らせる儀礼において、また「水飼いの道」916 (宇野 2015a: 129) では水飼いの儀礼における王の正装の一部をなした。

<sup>78</sup> [200] 「ウサギの尻尾 (*iishyira*)」: ウサギは機知に富み、王の軍事的機能の象徴とされる。「水飼いの道」1009 (宇野 2015a: 136)、「不敬の道」64、202 (宇野 2012: 69, 82 注 116)、「即位の道」865 (宇野 2013: 114) 参照。また、「戦争の道」73 では、王が自分の代りに戦争に行く遠征将軍に、勝利の赤い首飾りとウサギの尻尾を持たせる (d'Hertefeld & Coupez 1964: 160–161)。

<sup>79</sup> [201] 「入口の庇の支柱 (*kaanangazi*)」: (-*aanangazi* 9/12) 家の入口の敷居 (-*tabo* 7, 8) の上にかかる庇 (-*hamo* 11) を支えるために敷居の中央に立てる柱 (Coupez *et al.* 2005: 48, 737, 2395)。

<sup>80</sup> [206] 「彼は水辺で滑降し (*agatirimuka kuu nkomb*)、戻ってくる」: 意味不明。

級儀礼家が関与する部分に限定される：

*Igitenga* 籠から取ったソルガムとシコクビエを使って王の侍女が *umurorano* の時と同じ儀礼に従って粥を作る。ルワンダ王がそれを少し食べる。「王が初穂を食べた (*Umwami yaganuye*)」。翌日、ルワンダ王は *Bumbogo* からの貢物（蜂蜜、バナナ酒、たきぎ、小屋の壁を覆う細草 *ishinge*）を受取る。これらの貢物や *igitenga* 籠に残ったソルガムとシコクビエは大首長たち、重臣たち、宮廷の使用人たちに分配される。同じ日のうちに、王の命令により、普段はバナナ酒を混ぜるのに使う桶に牛乳を満たし、*Bumbogo* から来た人々がストローで飲む。彼らのために別の桶にバターも用意され、彼らはそれを体と樹皮布の服に塗りつける。なお、彼らは自分たちの食糧（植物性）を持ってきており、彼らのためにインゲンマメを用意するとしばしば書かれる<sup>81</sup>のは正確ではないようだ。初穂の儀礼用の牛乳を提供するために、*intulire* と呼ばれる *Nyaruguru* 省の雌牛たちが連れて来られる (*Bourgeois* 1957: 428)。

「初穂の道」でも今回はポレンタを作って食べる：

#### [208-228: ビールの消費とソルガムの粉挽き]

*Rugina*<sup>82</sup> と

*Myaka* の所の蜂蜜ビールを持ってくる。

<sup>81</sup> たとえば *Pagès* は次のように書いている：「運搬者一行にはお返しを与えられる。牛乳を桶 (*umuvule*) に満たし、別の桶に半煮えのインゲンマメを入れた。その上に酸敗したバターをかけると、ごちそうである。彼等の腹を膨らませるのが目的である。よく煮てない食料は消化が遅く、その間彼等の膨れたお腹は彼等が豪華にもてなされている (*ngo n'ishimo*) という印象を見る人に与える。会食者は牛飲馬食しないと帰らせてもらえなかったという。彼等は熱狂した群衆に見られて野次を浴びながら食べた。彼等は生理的欲求を満たしに行くことを許されなかったので、宮廷は動物の敷き藁ようになった。この騒ぎには宮廷の常連や近所の住人だけでなく大首長たちや彼等の家来も参加した。そこではまた聖牛 (*inyambo*) の陳列も行われた。これは多くの人にとって祝祭の重要な部分だった」(*Pagès* 1933: 502-503)。

<sup>82</sup> [208] 「*Rugina* (-*gina* 9/11)」: *Bumbogo* の *Ega* クラン *Swere* リニジのフツ王が初穂と一緒に宮廷に送った蜂蜜ビール (*Bourgeois* 1957: 426, cf. *Coupez et al.* 2005: 605, d'Hertefelt & *Coupez* 1964: 488)。

[210] 大ヒョウタン (235) に注ぐ、

小さな甕に注ぎなおすために。

Tsoobe が *igitenga* 籠の後ろに跪く。

王は籠の前に堂々と座る。

二人とも籠の蓋にソルガムの穂を四本置く<sup>83</sup>。

[215] パピルス製の *icyibo* 籠 (52, 63, 259) を四個持ってくる。

王はそこに両手に入れる、

*igitenga* 籠から掬い取ったものを、

Tsoobe に助けられて。

彼らは四つともいっぱいにする。

[220] *igitenga* 籠は家の奥に行く、

王権太鼓たちの前の棚の上に。

二つのすり臼を棚の前に置く。

棚に向き合って〔四籠の新穀の〕粉を挽く。

Rugina (208) を運んでくる。

[225] 王と Tsoobe はそのビールを味わう儀礼的動作をする。

四回。

王はそれを味わう。

寝台の棚 (64) にそれを置く。

#### [229–258: 土鍋で湯を沸かす]

*Iintarindwa* 軍 (67) の者が外に行って、

[230] 炉の支脚 (*amashyiga*)<sup>84</sup> を取ってきて、

土鍋 (*iinkono*) の大きさに合わせて並べる。

<sup>83</sup> [214] 「籠の蓋にソルガムの穂を四本置く (*sokoz*)」: 動詞-*sokoz*-は「櫛でとかす」だが、ここでは意味をなさない。d'Hertefelt & Coupez 1964: 312 によると、儀礼に複数回参加したことのある彼らのインフォーマントは、羽毛を置くように穂を置いたと説明したという。

<sup>84</sup> [230] 「炉の支脚 (*amashyiga*)」: (-*shyiga* 5, 6) 炉の中に正三角形に置いて鍋を支える三個の円錐状の物体 (Coupez *et al.* 2005: 2265)

きちんと設置したら、王が来る。

*umurembe*<sup>85</sup> と *ishyoza*<sup>86</sup> を持ってくる。

そしてそれらを上記 (210) のヒョウタンの端に固定し、

[235] 水をそのヒョウタンに注ぐ。

王は跪く、

上記 (231) の土鍋の前に。

彼は鍋に水を注ぐ、

一回、二回、三回、四回、五回、

[240] 六回、七回、

八回、九回。

それで終わる。

次に王の母が来て、

同じことをする。

[245] そしてまた王妃 (60)、Tsoobe、

Musana の子孫も。

<sup>85</sup> [233] *umurembe* (*rembe* 3, 4) : この植物名は Troupin によると、(1) イイギリ科 (ないしアカリア科) の *Dasylepis racemosa* (Troupin 1983: 430)、(2) シナノキ科グレウシア属の *Grewia mildbraedii* (Troupin 1983: 370)、(3) ガガイモ科 (Asclepiadaceae) のオオカモメヅル属 (*Tylophora*) の *Tylophora sylvatica* DECNE (Troupin 1985: 118) を指す。Coupez *et al.* は「トゲなしに異常に生長するトゲ植物」という語義を掲げ、Troupin の (2) (3) を挙げている (2005: 1892)。d'Hertefelt & Coupez は *tobotobo* の変種とする (1964: 306, 426)。 *tobotobo* はナス科ナス属の灌木 *Solanum aculeastrum* で (Troupin 1985: 376; Coupez *et al.* 2005: 2559)、秘典では「即位の道」21、58 (宇野 2012: 58–59, 64) にのみ出てくる。秘典での *-rembe* の用例を見ると、「*Gicuraasi* 月の道」58 (「ニガウリと *umurembe* を王権太鼓の上に置く」) では喪明けの象徴 (宇野 2016: 225)、「X. 戦争の道」24 (ニガウリなど多くの植物と) および 141–144 (「ニガウリと *umurembe* を Karinga 鼓や他の王権太鼓たちの上に置く」) では戦勝の象徴である (d'Hertefelt & Coupez 1964: 158–159)。

<sup>86</sup> [233] *ishyoza*: 不詳の植物 (*-shyoza* 5, 6)。秘典では「初穂の道」のここと、「火の道」110 に名前があるが、用法は書いてない。民間医療では、*ishyoza* は鎮静剤・鎮痛剤として (Lestrade 1955: 23, 79, 114; Bourgeois 1956: 41, 235)、また落雷で人が死んだ場所を浄めるためににエリスリナ、*ishyoza*、*umurembe*、*ivubgwe* の枝を地面に打ち込む (Bourgeois 1956: 33)。

*umurama* の薪<sup>87</sup> を持ってくる。

誰かが火をつける、

この土鍋の右側から。

[250] 粉を入れる熱湯を沸かすために。

王が土鍋の前まで来て、

跪いて手を叩き、敬意を表す。

終わると立ち上がり、

彼の母が同じことをする。

[255] そしてまた王妃、

Tsoobe、

Mumbogo の子孫も。

これで土鍋は吉になる。

#### [259-278: ポレンタ作り]

上記 (215) の籠たちを持ってくる、

[260] 四つとも粉でいっぱい。

侍女が土鍋から湯を少し汲む。

王は妻と Tsoobe に助けられて

彼らは粉を熱湯に入れる、四回。

妻が残りの粉を入れる。

[265] 彼らはまた助け合って、

スパチュラ (186) を突っ込む。

終わると彼らは立ち上がり、

侍女に場所を譲ってポレンタを掻き回させる。

侍女が料理を終えたら、

[270] 王の妻が立ち上って、鍋からポレンタを取り、

---

<sup>87</sup> [247] 「*umurama* の薪」: *-rama* 3, 4 はイチジク的一种。あるいはシクンシ科ヨツバナカズラ属の *Combretum molle* R. Br. ex G. Don (Troupin 1983: 532)。動詞 *-rama-* (「長生きする」) と掛ける (Lestrade 1955: 219)。



先ず王の *icyibo* 籠 (259) に入れる。

次に (誰かが) ポレンタをすくってその籠を満たし、

その籠を脇にやって、

またポレンタをすくって他の籠に入れる。

[275] だいたい終わったら、

上記 (270) の妻が戻り、

上記 (269) の侍女が彼女を助ける。

スパチュラにポレンタの大きな塊が残っている。

ポレンタ作りと並行して王は屋外に出て土を耕す一種の豊穰儀礼を行う：

#### [279-286: 炊事と農耕儀礼]

王は粉を湯に入れたら (263)、すぐ家の外に

[280] 鋤で耕しに行く

招待客と Bumbogo から来た人々と共に。

始めるのは王と Tsoobe。

そして Mumbogo の子孫が耕す。

他の人たちは耕すのを見ている。

[285] ポレンタを練るのが終わったら (275)、

耕作は終わる。

#### [287-314: 王たちがポレンタを食べる]

すぐに牛軍「尊敬すべき者たち」(54) から牛乳を持ってくる

エリスリナ製の二つの *inkongooro* 壺 (55) に入れて。

王は *igikondo* 輪 (194) を身に着ける。

[290] 初穂の腰蓑 (199) も。

彼は王座のストゥールに座る。

*ikidakombwa* 壺 (156) を運んでくる、

バター攪拌器用のネット (204) に入れて。

Tsoobe がスパチュラ (266) を持ってくる、

[295] 上記 (278) のポレンタが付いている。

彼は王の前に跪き、  
王はポレンタを取る。  
「尊敬すべき者たち」の牛乳（287）を、  
二回飲んだ後に。  
[300] 彼はポレンタを *ikidakombwa* 壺（292）に触れさせる<sup>88</sup>、  
四回。そして立ち上がる。  
また牛乳を飲む。  
次に王母が来る。  
彼女の *icyibo* 壺が運ばれる。  
[305] 彼女はポレンタを *ikidakombwa* 壺に触れさせる。  
四回。  
王の妻が来る。  
王の *icyibo* 壺からポレンタを取る。  
そして同じことをする。  
[310] Tsoobe が彼自身の *icyibo* 壺を取る。  
四回。  
Mumbogo の子孫が<sup>§</sup>  
彼自身の *icyibo* 壺を取る。  
次いですべてが運ばれる。

前回 *umurorano* 儀礼で王は王妃と儀礼的性交をしたが、今回は Cyirima の  
許嫁と性交し、王と Cyirima が一体化している：

**[315-319: 王=Cyirima 霊による豊穡儀礼]**

[315] 王は寝台に行き、  
上記（168）の Ega の娘と行為をする。  
上記（170）の Tsoobe の許嫁は、  
寝室の入口に立ち、

---

<sup>88</sup> [300] 「*ikidakombwa* 壺に触れさせる」：壺の中のバターをつける。

歓声を上げる。

[320-333: Cyirima 祠に帰る]

[320] Tsoobe は王宮 (*ru*go) で夜を過ごしてはならない。

小さな子供でさえも。

全員が退出する。

太鼓たちはそこで夜を過ごし、

早朝、Cyirima の所へ行く。

[325] *igitenga* 籠 (220) を空にし、

*ikidakombwa* 壺 (305) と一緒に Cyirima の所へ運ぶ。

バターは *indeembere*<sup>89</sup> 製の槽 (*akavure*)<sup>90</sup> に入れる。

上記 (316) の Ega の許嫁と

Tsoobe の許嫁 (317) は、

[330] Cyirima の所へ行って、そこに住み着く (*bakiicara*)<sup>91</sup>。

Bumbogo の貢物は脇を通して<sup>92</sup>、

裏庭の Cyirima の所へ行く。

首長たち (140) の牛乳の貢物も脇を通していく。

[334-349: Bumbogo から来た人々へのもてなし]

二つの *igicuba* 壺を持ってくる、

[335] *Rwimaana*<sup>93</sup> の。

酸敗したバターを持ってきて、

---

<sup>89</sup> [327] *indeembere* (-*reembere*) : 秘典ではここにしか出て来ない植物で、*Solanum aculeastrum* (Coupez et al. 2005: 1893)。

<sup>90</sup> [327] 「槽 (-*vure*)」: 木をくりぬいた舟状の槽で、数人用の皿、バナナ酒用のジュースを絞る容器、あるいは子牛の飼葉槽などとして用いる (Coupez et al. 2005: 2765; 図 Pauwels 1969: 86, fig. 15, 10)。

<sup>91</sup> [330] 「そこに住み着く (*bakiicara*)」: (-*iicar*-) Cyirima 祠の世話をするため。

<sup>92</sup> [331, 333] 「脇を通る、迂回する (*rigahita*)」: 貢物を Cyirima 祠に運ぶ特定の経路を表す動詞だろうが、文脈からは具体的な動きは分らない。Yuhi V Musinga 王の王宮では、Cyirima 祠は王宮外苑 (*karubanda*) の外周上にあったので (Lugan 1997: 200)、王宮内を通らず王宮の囲いの外側を迂回して行くこともできた。そのことかもしれない。

<sup>93</sup> [335] *Rwimaana*: 不詳の人名。

先ず、最初の *igicuba* 壺に入れ、  
別の壺のバターもそこに入れて満たし、  
もう一つ [の *igicuba* 壺] に牛乳を入れる、  
[340] あるだけ全部を。  
Bumbogo から来た人々に振舞う。  
樹皮布を着た人々は、  
上記 (336) のバターを体に塗り始める。  
次いで上記 (339) の牛乳を飲むべき人々は、  
[345] がぶがぶと飲みつづける。  
雄牛を一頭殺す、  
牛群「戦う者たち」<sup>94</sup> の。  
ビールと牛乳の係りは [テキストに脱落がある]  
宮廷の役人に属す。

#### [350-356: 祭の終り]

[350] 長い角の牛たちが入場する、  
牛軍 *Insanga*<sup>95</sup> の牛たちや毛色が多様な牛たちと共に。  
祭は昼も、  
夜も続く。  
終りの合図があるのは、太鼓に  
[355] 「戦う者たち」(347) の雄牛の血が塗られた時である。  
初穂の大祭はこうして終る。

<sup>94</sup> [347]「戦う者たち (*Indwanyi*)」: 宮廷で食用にする肉と王権太鼓に塗る血を取るために各牛軍が提供した牛の群の名前 (Kagame 1952: 48; Kagame 1961: 9; d' Hertefeld & Coupez 1964: 447)。

<sup>95</sup> [351]「牛軍 *Insanga*」: 王朝創始者 *Gihanga* が所有した牛の直接の子孫とされる牛軍で、宮廷儀礼家の序列で第三位を占める *Zigaaba* クラン *Heeka* リニジが管理した (Kagame 1947: 369; Kagame 1961: 12-13; Kagame 1963: 15-18)。

[357-385: 牛王が実施するときの変更点]

牛王たち<sup>96</sup>の治世では、

*igitenga* 籠が<sup>3</sup> *Tsoobe* の所で夜を過ごすとき (142)、

普通の太鼓と小型リズム鼓が<sup>3</sup>出迎える<sup>97</sup>。

[360] 翌朝 (145)、

王権太鼓たちと二人の許嫁たちが、

*Tsoobe* の宿に来る<sup>98</sup>。

*Karinga* 鼓と他の王権太鼓たちが、

先頭を進み、

[365] その後に許嫁たち、

最後に、*ikidakombwa* 壺が続く (153)。

その到着前に、雄牛を一頭解体する (*-baag*) (145)、

牛群「戦う者たち」(347) から連れて来た雄牛を。

太鼓たちと許嫁たちは家に入る。

[370] 太鼓たちは棚に、娘たちは家の中心の部屋に行く。

*Tsoobe* がビールと牛乳を持ってきて、

太鼓たちの前に置き、

それを味わい、*Nyabirungu* の子孫<sup>99</sup> に渡す。

*Nyabirungu* の子孫は、

[375] 牛乳も肉も全て持って、

儀礼家たち<sup>100</sup> に供する。

---

<sup>96</sup> [357] 「牛王たち」：四世代に一回ずつ出現する *Cyirima* 王と *Mutara* 王のこと。詳しくは宇野 2014 参照。

<sup>97</sup> [359] 143 では *Tsoobe* クランの太鼓が迎える。

<sup>98</sup> [362] 163-181 では王権太鼓と許嫁は王宮外苑で初穂を迎えるだけ。

<sup>99</sup> [373] 「*Nyabirungu* の子孫」：宮廷儀礼家の序列で第二位の *Tege* の儀礼王。ルワンダの王や儀礼王の即位、王権太鼓・起臥太鼓の制作・管理を司った (*Kagame* 1947: 368-369; 宇野 2013; 宇野 2014)。355 では *Tege* が立ち会わなかったのか。

<sup>100</sup> [376] 「儀礼家たち (*abiiru*)」：ここでは *Bumbogo* の下級儀礼家たちを指す。

王権太鼓たちは出て行き、  
入口の敷居近くに戦闘隊形で並ぶ。  
Nyabirungu の子孫が塗る、  
[380] 上記 (367) の雄牛の血を太鼓たちの頭部に。  
塗り終わったら、  
太鼓たちを輿に乗せる。  
*igitenga* 籠 (358) も出て行き、  
輿に乗せて、  
[385] 主殿の王の所に行く。(終)

以上の「初穂の道」と Bourgeois の記述は補完しあうだけでなく矛盾するところもあるが、紙数の関係もあり、既に指摘した日程のずれの問題に限って次に整理してみたい。

## 6. 初穂祭の日程のずれの背景

「初穂の道」の諸行事の日程は、前節で見た Bourgeois の記述ばかりでなく、Pagès や Kagame、Bourgeois の日程ともずれている。また「*gicuraasi* の道」(宇野 2016) に規定された *gicuraasi* 儀礼の服喪と喪明けの祝祭の日程やそれについての Pagès、Kagame、あるいは Luc de Heusch の所論とも食い違っている。しかし、これを不審に思った研究者はいなかったようである。わずかに、「初穂の道」の構造分析もどきを試みたアメリカの歴史家 David Newbury が「初穂の道」と Kagame、Bourgeois の初穂祭の月のずれを注で指摘しただけである (Newbury 1981: 100, note 5)。d'Hertefelt & Coupez (1964) に至っては、「初穂の道」の解説で、日程のずれに触れないばかりか、初穂儀礼は「*kamena* 月に完了した」と、「道」本文とは異なる日程 (Pagès /Kagame 説) を述べているほどである (d'Hertefelt & Coupez 1964: 50)。

しかし、私は日程のずれは案外重要な問題を含んでいるのではないかと思う。まず、諸家の主張をまとめてみる。

(1) Pagès によれば、Bumbogo からの主要作物の導入を記念して都で毎年収穫祭を祝うようになった。「当初」、シコクビエの初穂祭は2月か3月に、ソルガムのそれは5月に行われ、どちらにも *isogi* が添えられたが、「近年」は、シコクビエ、ソルガム、*isogi* はまとめて一度に都に運ばれて、一回の祭で祝うようになったという (Pagès 1933: 500; Gorju 1938: 42; Pauwels 1969: 77)。Pagès (1883–1951) はルワンダで42年間布教し、うち26年間は王都に近い Nyundo で過ごした人である (Heremans, Bart & Bart 1982: 18) から、シコクビエとソルガムの収穫を別々に祝った頃のことを知っていたかどうかはともかく、両者の収穫をまとめて5月に祝う「近年」の状況は彼自身が目撃していたと考えられる。

(2) Kagame は、Pagès の「近年」の日程と同じく、初穂祭が *kamena* 月(6月初)に祝われたとする。二人はソルガムの播種の時期には触れていないが、いわゆる *amaaka* 作のソルガムであることは収穫期から明らかである。しかし Kagame によると、初穂祭の準備をする別の儀礼が *werurwe* 月(3月)に行われた。どういう準備なのか彼は書いていないが、この儀礼は文化史的にも重要で、ルワンダにソルガムが導入される以前の古い儀礼の名残で、その最初の段階では王はカボチャの種、*ikinyobwa* というインゲンマメ、そしてシコクビエのペーストを食べたという (Kagame 1959: 63–64)。彼は1959年の本にはこの儀礼の名前を書いていないが、1975年の本には「*umurorano* という一般には余り知られていない儀式」と呼んでいる (Kagame 1975: 17)。Kagame のいう *weerurwe* 月の *umurorano* 祭は Pagès の2月ないし3月のシコクビエの初穂祭に相当するものと考えられるが、Pagès がシコクビエの収穫祭はソルガムのそれに吸収されたと言うのに対し、Kagame はヒョウタン・シコクビエなどの古い収穫祭が *umurorano* 祭という「初穂祭の準備的儀礼」に変化して存続したとするのである。

(3) 先に見たように、Bourgeois によれば、*nzeri* 月(9–10月)にソルガムとシコクビエを同時に播き、*weerurwe* (3–4月)に *umurorano* (シコクビエとソルガムの未熟な穂)を都に運んでその粥をルワンダ王が食べた後、初

穂祭プロパーのための収穫を行った (Bourgeois 1957: 418–428, 607)。

(4)「初穂の道」では *nzeri* 月 (9～10 月) にソルガムとシコクビエを播種し、*mutarama* 月 (1～2 月) の後半に *umurorano* を都に運び、籠の中の粉に熱湯をかけて練った物を王が目視し、*gashyaantare* 月 (2・3 月) に初穂祭プロパーを行う (34–39、73–75 行)。

これらを前稿 (宇野 2016) で見た季節、月、農業暦、*gicuraasi* の服喪と喪明け祭と組み合わせて一覧表にしたのが次ページの表 1 である。これを見れば明かなように、「初穂の道」や Bourgeois のソルガムとシコクビエの播種と収穫は農業暦のシコクビエおよび *amahore* 作のソルガムの播種と収穫に対応している。また Pagès の「当初」のシコクビエの初穂祭と Kagame の *umurorano* もこのサイクルに属している。他方、Pagès や Kagame のソルガムの収穫祭はソルガムの *amaaka* 作に従っている。日程のずれは、「シコクビエとソルガムが相次いで成熟する二つの季節」(Gorju 1938: 42) のずれなのである。

このことは、ブルンジの研究者 Mworoha も指摘していて、ルワンダの「初穂の道」について、「[ルワンダでは] ソルガムの通常の播種は 12・1 月に行われたから、「[初穂の道」で] ソルガムを 9 月に植えるのは純粹に儀礼的であった」とか、「この儀礼的なソルガムは、農民たちのソルガムのように 12 月ではなく、シコクビエにあわせて 9 月に播種された」(Mworoha 1977: 261) とコメントしている。

しかしまだ問題は残っている。宮廷に主たる情報源をもっていた Kagame が「初穂の道」とは別の栽培周期の日程を書き、Bumbogo に情報源のあった Bourgeois の方が「初穂の道」に近い日程を示しているのは奇妙である。特に Pagès は初穂祭が 5 月に祝われるのを実際に見たと思われるので、祭の台本となったはずの「初穂の道」が別の日程に従っているのは理解しにくい。第 2 節で 1925 年の Gashamura の逮捕が宮廷儀礼家集団内の儀礼情報の共有や伝承にも多かれ少なかれ支障を来したのではないかと書いたのは、このあたりのことも指している。



表 1

季節	陰暦月	西暦月	農業暦	Pagès	Kagame	Bourgeois	「初穂の道」
小雨期	<i>nzeri</i>	9-10	シコクビエ・ソルガム ( <i>amahore</i> ) 播種	(シコクビエ 播種)	(シコクビエ 播種)	ソルガム・ シコクビエ 播種	ソルガム・ シコクビエ 播種
	<i>ukwakira</i>	10-11					
	<i>ugushingo</i>	11-12					
	<i>ukuboza</i>	12-1	ソルガム ( <i>amaaka</i> ) 播種	(ソルガム播 種)	(ソルガム播 種)		
小乾期	<i>mutarama</i>	1-2	同上				<i>umurorano</i> (粥を目視)
	<i>gashantare</i>	2-3		シコクビエ の初穂祭			ソルガム・ シコクビエ の初穂祭
大雨期	<i>werurwe</i>	3-4	シコクビエと <i>amahore</i> 作 ソルガムの 収穫		<i>umurorano</i> 儀礼 (シコクビエ などの古い 収穫儀礼)	<i>umurorano</i> 儀礼 ソルガム・ シコクビエ の初穂祭?	
	<i>mata</i>	閏月					
	<i>gicuraasi</i>	4-5		(gicuraasi 月の服喪)			
	<i>kamena</i>	5-6	<i>amaaka</i> 作 ソルガムの 収穫	(喪明け祭) ソルガム・ シコクビエ 初穂祭	(喪明け祭) ソルガム初 穂祭	(喪明け祭) ソルガム・ シコクビエ の初穂祭?	(喪明け祭)
大乾期	<i>nyakanga</i>	6-7	同上				
	<i>Tuumba-nyakime</i>	7-8				初耕作、 鋤の支給	
	<i>Tuumba-kaanama</i>	8-9					鋤の支給

## 7. Umurorano 儀礼と閏月

最後に、「初穂の道」、Kagame、Bourgeois が各様の説明をしている *umurorano* 儀礼について考えておきたい。

*umurorano* 儀礼は、Kagame にとっては初穂祭の「準備的な儀礼」であ

り、またソルガム導入以前の初穂祭の名残でもあった (Kagame 1959: 63–64; Kagame 1975: 17)。Bourgeois の場合、この語は動詞 *kurora* 「初めて見る」「発見する」から派生した名詞で、具体的には *Weerurwe* 月 (4 月) に *Bumbogo* から都に運ぶソルガム・シコクビエの未熟の穂 20 kg ほどを指していた (Bourgeois 1957: 423–424)。d’Hertefelt & Coupez は「初穂の道」32 の *umurorano* を「見本 (*echantillon*)？」と疑問符をつけて訳し、注では *-rorano* の語根 *-ror-* が「見る」を意味すること、および 58、62 行で王たちがポレンタを四回 (つまり吉数回) 見る儀礼的動作をすることから、*umurorano* は「新しい収穫の一種の見本」だったと推測し、解説では「収穫の最終的な成功を確保するために、王は新しいソルガムの見本に対して豊穡儀礼 (儀礼的性交) を行った」と述べている (d’Hertefelt & Coupez 1964: 50, 79, 308)。

恐らく、作物が順調に生育している場合は Bourgeois や d’Hertefelt & Coupez の解釈でいいのだろう。しかし問題は、*umurorano* を見て、作物は全くの凶作ではないが<sup>101</sup> 収穫・初穂祭の予定月 (「初穂の道」と Bourgeois では *gashyantare* 月～*werurwe* 月、Pagès と Kagame では *kamena* 月) には間に合わないと判断したときはどうしたのかということである。

その時は、短期的判断としては本番の初穂祭を遅らせる必要があり、中長期的には閏月 (*mata*) を入れて季節と暦のずれを調整したのではないかと思う。

陰暦のひと月は 29.5 日で、12 を掛けると 354 日になり、太陽暦の 365 日より 11 日短く、これが三回繰り返すと約 1 ヶ月ずれる。陰暦月に従って農作業を予定していると、雨が降ってから行うべき作業を雨が降る前にするような事態が生じうる。現に、閏月は大雨期と大乾期の変わり目付近に設定された。Bourgeois によれば、「*mata* は 4 月 (*werurwe*) と 5 月 (*gicurasi*) にまたがり、それらの月の間に雨期の終りの雨が洪水のように降り、それらの雨が農業と牧畜の豊穡の決定的要因になる」 (Bourgeois 1957: 609)。つまり、雨期の最後の雨を受けて作物が育った後に収穫月が来るように調整したのである。

---

<sup>101</sup> ここでは全くの凶作の場合は考えない。

ソルガムの *amaaka* 作 (12・1月播種～6・7月収穫のサイクル) で考えていた Kagame によれば、閏月は必ず大雨期の *weerurke* 月 (3・4月) と *gicuraasi* 月 (4・5月) の間に挿入されたが、閏年の間隔 (三年に一度とか) は決まっておらず、「6月 (*kamena* 月) のソルガムの初穂祭との関連で、雨期とソルガムの収穫のずれが目立つと宮廷儀礼家たちが実証的に判断したらすぐに入れた」という (Kagame 1959: 63, note 1)。

この「実証的な判断」の根拠が、全国で最も自然環境に恵まれた Bumbo-go の多くの丘を含む特別栽培区から送られた *umurorano* だったのではないか。宮廷儀礼家たちは、日頃から雨の降り方を研究し、作物の育ち具合も見ていただろうから、暦月が早く進みすぎているという判断は既に形成されていただろうが、小乾期から大乾期への変わり目にあたる *weerurke* 月 (3・4月) 頃に王に標本を儀礼的に目視させて最終的な判断をし、必要ならば閏月を入れたのではなかろうか。小雨期の最初の陰暦一月 *nzeri* 月 (9・10月) を雨の戻りと一致させるよう調整した方が簡単なようにも思われるが、恐らく雨の戻りだけを暦の調整の基準とするにはブレがありすぎたのだろう<sup>102</sup>。

それでは、ソルガムの *amahore* 作やシコクビエの栽培周期に従う「初穂の道」や Bourgeois の日程ではどうであろうか。閏月は必ず *weerurwe* 月と *gicuraasi* 月の間に挿入しなければならないとすれば、Bourgeois の日程では *weerurwe* 月に *umurorano* 儀礼、*weerurwe* 月～*gicuraasi* 月に初穂祭がある

<sup>102</sup> 毎年、全国的農業祭を機会に季節と暦のずれを調整するという方法は、ブルンジにもあった可能性があるらしい。ブルンジにはルワンダの *gicuraasi* 月と同じ6月頃の雨期と乾期の境目に *rwirabura* 「まっ黒」という月があり、*gicuraasi* 月に似た謹慎期間 (結婚、家の新築、歓楽の禁止、など) だったことが知られている (Bourgeois 1957: 609-610)。フランスの歴史家 J.-P. Chrétien は、この *rwirabura* 月が閏月だった可能性があるという。複数のインフォーマントが *rwirabura* 月には「年を食べる」つまり *umuganuro* 祭を祝うことは出来ず、祭は前の月か後の月に回さなければならなかったと言ったのを、Chrétien は、前の月に穀物がまだ青くて収穫するには早すぎるときは、祭をひと月延期したが、それは十三番目の *rwirabura* 月を入れて暦と農業暦を一致させたと解釈した (Chrétien 1982: 155; cf. Chrétien 1979)。これは単に *rwirabura* 月が悪い月だから *umuganuro* (播種祭) を祝うのを避けただけかもしれないが、ブルンジの類似例はルワンダの *gicuraasi* 月の儀礼と初穂祭を Ruganzu II Ndori 王という英雄に結びつける一国史的な枠組より広い文脈で考える必要性を示唆している。

から、*weerurwe* 月の後に閏月を入れて初穂祭の開催を延ばすことも不可能ではないとしても、「初穂の道」では *mutarama* 月（1・2 月）に *umurorano* 儀礼、*gashantare*（2・3 月）に初穂祭があるから、仮に閏年を入れる判断をしても、その年の *amahore* 作の収穫・初穂祭には間に合わない。当年の季節と収穫祭のずれを調整するために閏月を使うためには、閏月を *weerurwe* 月より前に入れる必要があるが、そういう事例への言及は文献には見られない。

これと関連して、*amahore* 作から *amaaka* 作への初穂祭の乗り替えの可能性も排除できない。つまり、*nzeri* 月に播種した「儀礼的なソルガム」が *umurorano* 儀礼の段階で不作で収穫の見込みがないと判断され、三ヶ月遅れて育ちつつある「農民のソルガム」に期待できそうな場合、後者を使って初穂祭を祝うということもあったかもしれない。そう考えると、二種類の日程は必ずしも相互排他的ではなかったかもしれない。その場合は表 1 の *Bourgeois* の列で収穫祭が *gicuraasi* 月を避けて *kamena* 月にずれ込んだ時の日程に近いだろう。

## 8. おわりに

しかし、「初穂の道」の日程が、「道」を宮廷儀礼家から採集した本人である Kagame や初穂祭廃止以前の状況を体験した *Page*s の日程と噛み合わず、「初穂の道」の日程だけが早いという事実は依然として残る。王朝秘典の儀礼仕様は当代の王にあわせて常に更新されていたから、「初穂の道」が Kagame のいうソルガム導入以前のシコクビエの収穫祭の仕様の名残である可能性はまずないが、*Page*s のいう 2・3 月のシコクビエの収穫祭と 5 月のソルガムの収穫祭の仕様が初穂祭廃止後の 20 年間に混線して伝承されていたのを Kagame が採集したということもあり得たかもしれない。いずれにせよ、ベルギー支配の初期まで年中儀礼として行われていた宮廷儀礼を単純に「植民地以前の」王権儀礼と見る<sup>103</sup> ことには多かれ少なかれ危うさが伴うのであろう。

---

<sup>103</sup> Newbury 1981 はそのような観点から「初穂の道」を分析している。

## 文献目録

- Arnoux, Alexandre. 1918. «La divination au Rwanda.» *Anthropos*, XII–XIII, 1, 1–57.
- Bourgeois, R. 1954. *Banyarwanda et Barundi. Tome II. La coutume*. Bruxelles, Institut royal colonial belge. Section des Sciences morales et politiques, Mémoires in 8°, XXXV.
- Bourgeois, R. 1956. *Banyarwanda et Barundi. Tome III. Religion et magie*. Bruxelles, Académie royale des Sciences coloniales, Classe des Sciences morales et politiques, Mémoires in 8°, Nouvelle série, Tome IV, fasc. 2 et dernier. (Ethnographie).
- Bourgeois, R. 1957. *Banyarwanda et Burundi. Tome I. Ethnographie*. Bruxelles, Académie royale des Sciences coloniales, Classe des Sciences morales et politiques, Mémoires in 8°, Nouvelle série, Tome XV, fasc. unique.
- Chrétien, J.-P. 1979. «Les «années» de l'éleusine, du sorgho et du haricot. Écologie et idéologie.» *African Economic History*, spring 1979, 75–92 (Chrétien, J.-P. 1993. *Burundi. L'histoire retrouvée. 25 ans de métier d'historien en Afrique*. Paris, Editions Karthala, 79–103.)
- Chrétien, J.-P. 1982. «Le sorgho dans l'agriculture, la culture et l'histoire du Burundi.» *Journal des africanistes*, 52 (1–2), 145–162.
- Coupez, A. et Th. Kamanzi. 1962. *Récits historiques rwanda dans la version de C. Gakaniisha*. Tervuren, Musée Royal de l'Afrique Centrale. Annales, série in 8°, Sciences humaines, n° 43.
- Coupez, A., Th. Kamanzi, et al. 2005. *Inkoranya ikinyarwaanda mu kinyarwaanda no mu gifaraansa. Dictionnaire rwanda—rwanda et rwanda—français*. 3 tomes. Butare, Institut de Recherche Scientifique et Technologique/Tervuren, Musée Royal de l'Afrique Centrale.
- d'Hertefelt, Marcel, et André Coupez. 1964. *La royauté sacrée de l'ancien Rwanda: texte, traduction et commentaire de son rituel*. Bujumbura, Travaux de l'Université de Bujumbura, série A. Faculté de Philosophie et Lettres, n° 2/Tervuren, Extrait des Annales du Musée Royal de l'Afrique Centrale, Série in-8°, Sciences Humaines, n° 52.
- Delmas, Léon. 1950. *Généalogie de la noblesse (les Batutsi) du Ruanda*. Kabgayi: Vicariat Apostolique du Ruanda.
- Des Forges, Alison Liebhafsky. 1972. «Defeat is the Only Bad News: Rwanda under Musinga, 1896–1931.» PhD. thesis, Yale University. (Des Forges, Alison Liebhafsky. 2011. *Defeat is the Only Bad News: Rwanda under Musinga, 1896–1931*. Edited by David Newbury. Foreword by Roger V. Des Forges. Madison and London, University of Wisconsin Press.)
- Gahama, Joseph. 2001. *Le Burundi sous administration belge. La période du mandat 1919–1939*. Deuxième édition revue et corrigée. Paris, Karthala.
- Gorju, Mgr et ses missionnaires. 1938. *Face au royaume hamite du Ruanda. Le royaume frère de l'Urundi. Essai de reconstitution historique. Mœurs pastorales. Folklore*. Bruxelles, Vromant & Co.
- Heremans, Roger, Annie Bart et François Bart. 1982. «Agriculture et paysages rwandais à travers des sources missionnaires (1900–1950).» *Cultures et développement*, 14

(1), 3–39.

- Historique et chronologie du Ruanda*. 1956. Kabgayi, Vicariat apostolique du Ruanda.
- Kagame, Alexis. 1947. «Le code ésotérique de la dynastie du Rwanda.» *Zaire*, 1 (4), 363–386.
- Kagame, Alexis. 1952. *Le code des institutions politiques du Rwanda précolonial*. Bruxelles, Institut royal colonial belge. Section des Sciences morales et politiques, Mémoires, Collection in-8°. Tome XXVI, fasc. 1.
- Kagame, Alexis. 1954. *Les organisations socio-familiales de l'ancien Rwanda*. Bruxelles, Académie royale des Sciences coloniales. Classe des Sciences morales et politiques, Mémoires, Collection in-8°. Tome XXXVIII, fasc. 3.
- Kagame, Alexis. 1959. *La notion de génération appliquée à la généalogie dynastique et à l'histoire du Rwanda des Xe – XIe siècles à nos jours*. Bruxelles, Académie royale des Sciences coloniales. Classe des Sciences morales et politiques, Mémoires in-8°, Nouvelle série, t. IX, fasc. 5.
- Kagame, Alexis. 1961. *L'histoire des armées-bovines dans l'ancien Rwanda*. Bruxelles: Académie royale des Sciences d'Outre-Mer. Classe des Sciences morales et politiques, Mémoires in-8°. Nouvelle série. Tome XXV, fasc. 4.
- Kagame, Alexis. 1963. *Les milices du Rwanda précolonial*. Bruxelles: Académie royale des Sciences d'Outre-Mer. Classe des Sciences morales et politiques, Mémoires in-8°. Nouvelle série. Tome XXVIII, fasc. 3. (Histoire).
- Kagame, Alexis. 1969. *Introduction aux grands genres lyriques de l'ancien Rwanda*. Butare, Editions Universitaires du Rwanda.
- Kagame, Alexis. 1972. *Un abrégé de l'ethno-histoire du Rwanda*. Tome I. Butare, Editions Universitaires du Rwanda.
- Kagame, Alexis. 1975. *Un abrégé de l'histoire du Rwanda de 1853 à 1972*. Tome II. Butare, Editions Universitaires du Rwanda.
- Kimonyo, Jean-Paul. 2008. *Rwanda. Un génocide populaire*. Paris, Karthala.
- Lestrade, Arthur. 1955. *La médecine indigène au Ruanda et Lexique des termes médicaux français—urunyarwanda*. Bruxelles, Académie royale des Sciences coloniales. Classe des Sciences morales et politiques, Mémoires in-8°. Nouvelle série. Tome VII, fasc. 1. (Ethnographie).
- Lugan, Bernard 1980. «Nyanza, une capitale royale du Rwanda ancien.» *Africa Tervuren*, 26 (4), 98–112.
- Lugan, Bernard. 1997. *Histoire du Rwanda. De la préhistoire à nos jours*. Paris, Bartillat.
- Maquet, Jacques J. 1954. *Le système des relations sociales dans le Ruanda ancien*. Tervuren, Musée Royal du Congo Belge. Annales, Série in-8°, Sciences Humaines, Ethnologie, vol. 1.
- Maquet, Jacques-J. 1961. *The Premise of Inquiry in Rwanda*. London, Oxford University Press for the International African Institute.
- Mworoha, Émile. 1977. *Peuples et rois de l'Afrique des Lacs. Le Burunji et les royaumes voisins au XIXe siècle*. Dakar-Abidjan, Les Nouvelles Éditions Africaines.
- Newbury, David. 1981. «What role has kingship? An analysis of the Umuganura of Rwanda as presented in Marcel d'Hertefeldt and André Coupez, *La royauté sacrée de l'ancien Rwanda* (1964).» *Africa-Tervuren*, XXVII, 4, 89–101 (Reprinted in

- David Newbury. 2009. *The Land beyond the Mists: Essays on Identity and Authority in Precolonial Congo and Rwanda*. Athens, Ohio University Press, pp. 229–251.)
- Nyagahene, Antoine. 1997. «Histoire et peuplement. Ethnies, clans et lignages dans le Rwanda ancien et contemporain. » Thèse de doctorat, Université Paris 7—Denis Diderot. Lille, Atelier national de reproduction des thèses.
- Pagès, A. 1933. *Au Rwanda sur les bords du lac Kivu (Congo belge). Un royaume hamite au centre de l'Afrique*. Bruxelles: Institut Royal Colonial Belge, Section des Sciences morales et politiques. Mémoires.—Collection in-8°, Tome I.
- Pauwels, Marcel. 1955. «Les métiers et les objets en usage au Rwanda,» *Annali lateranensi*, XIX, 185–294.
- Pauwels, Marcel. 1969. «L'agriculture au Rwanda et tout ce qui s'y rapporte.» *Annali di Pontificio museo missionario etnologico*, vol. 33, 31–123.
- Troupin, Georges (éd.). 1978, 1983, 1985, 1987. *Flore du Rwanda. Spermatophytes*. Vol. I, II, III et IV. Tervuren: Musée royal de l'Afrique central. Annales, Série in-8°, Sciences économiques, nos. 9, 13, 15, et 16.
- Vansina, Jan. 2001. *Le Rwanda ancien: Le royaume nyiginya*. Paris, Karthala.
- Vansina, Jan. 2004. *Antecedents to Modern Rwanda. The Nyiginya Kingdom*. Translation by the author of *Rwanda ancien* with an update to the chronology between 1876 and 1885. Madison: University of Wisconsin Press.
- 宇野公一郎 2007 「ルワンダの王と王母の系譜の構造」『論集（東京女子大学紀要）』57(2), 113–150.
- 宇野公一郎 2010 「ルワンダ王国の政治思想における《祖国のために死ぬこと》」『論集（東京女子大学紀要）』60(2), 167–206.
- 宇野公一郎 2011 「ルワンダ王国の戦勝儀礼」『論集（東京女子大学紀要）』61(2), 95–138.
- 宇野公一郎 2012 「ルワンダ王の葬式」『論集（東京女子大学紀要）』62(2), 47–85.
- 宇野公一郎 2013 「ルワンダ王の即位式」『論集（東京女子大学紀要）』63(2), 87–139.
- 宇野公一郎 2014 「ルワンダの王権再生儀礼（1）：王権太鼓の更新」『論集（東京女子大学紀要）』64(2), 121–175.
- 宇野公一郎 2015a 「ルワンダの王権再生儀礼（2）：水飼い儀礼」『論集（東京女子大学紀要）』65(2) : 111–158.
- 宇野公一郎 2015b 「ルワンダ宮廷の火の儀礼」『論集（東京女子大学紀要）』66(1) : 73–101.
- 宇野公一郎 2016 「ルワンダ王国の *Gicuraasi* 月の儀礼」『論集（東京女子大学紀要）』66(2) : 205–234.

キーワード

ルワンダ、初穂の道、収穫祭、閏月、植民地支配、宮廷儀礼禁止